

中国横断自動車道尾道松江線建設 に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（7）

札 場 古 墳
大 平 遺 跡
後 山 大 平 古 墳

2009

財団法人 広島県教育事業団

例　　言

- 1 本書は、平成 17（2005）年度及び平成 19（2007）年度に調査を実施した中国横断自動車道尾道松江線建設事業に伴う札場古墳及び大平遺跡・後山大平古墳（広島県三次市後山町所在）の発掘調査報告である。
- 2 発掘調査・整理・報告書作成は、日本道路公团中国支社（平成 17 年 10 月から西日本高速道路株式会社中国支社）・国土交通省中国地方整備局三次河川国道事務所との委託契約により財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室が行った。
- 3 発掘調査は、札場古墳は唐口勉三（現・広島県教育委員会）・鍛治益生・伊藤実（現・広島県立歴史民俗資料館）、大平遺跡・後山大平古墳は鍛治・島田朋之が担当した。
- 4 出土遺物の整理・復元・実測・写真撮影、図面の整理は、唐口・鍛治が中心に行った。
- 5 札場古墳は唐口が、大平遺跡・後山大平古墳は鍛治が執筆し、編集は鍛治が行った。
- 6 本書に使用した遺構の略号は次のとおりである。
S B：竪穴住居跡・竪穴住居状遺構、P：柱穴・小穴
- 7 遺物実測図の土器の断面は、須恵器は黒ヌリ、弥生土器・土師器は白ヌキである。
- 8 図版と挿図の遺物番号は同一である。
- 9 本書に使用した北方位は、札場古墳は第Ⅲ－1 図が平面直角座標系第Ⅲ座標系北、その他は磁北、大平遺跡・後山大平古墳は平面直角座標系第Ⅲ座標系北である。
- 10 第 2 図は国土交通省国土地理院発行の 1 : 25,000 地形図（永田、三良坂）を使用した。

目 次

I	はじめに.....	(1)
II	位置と環境.....	(3)
III	札場古墳	
1	調査の概要	
(1)	遺跡の状況	(9)
(2)	調査の方法・概要	(9)
2	遺構と遺物	
(1)	古墳の検出遺構と出土遺物	(11)
(2)	その他の検出遺構と出土遺物	(22)
3	まとめ	
(1)	墳丘について	(26)
(2)	石室について	(26)
(3)	出土遺物について	(26)
IV	大平遺跡	
1	調査の概要	
(1)	遺跡の状況	(31)
(2)	調査の方法・概要	(31)
2	遺構と遺物	
(1)	検出遺構	(33)
(2)	出土遺物	(41)
3	まとめ	
(1)	集落跡について	(48)
(2)	出土遺物について	(48)
V	後山大平古墳	
1	調査の概要.....	(53)
2	遺構と遺物	
(1)	検出遺構	(54)
(2)	出土遺物	(54)
3	まとめ.....	(57)

挿図目次

第Ⅰ図 中国横断自動車道尾道松江線路線図	(2)
第Ⅱ図 周辺遺跡分布図 (1:25,000)	(5)
札場古墳	
第Ⅲ- 1図 周辺地形図 (1:2,000)	(8)
第Ⅲ- 2図 調査前地形測量図 (1:300)	(9)
第Ⅲ- 3図 墳丘測量図 (1:150)	(10)
第Ⅲ- 4図 墳丘土層断面実測図 (1:60)	(12)
第Ⅲ- 5図 墳丘南側石積・北側列石実測図 (1:40)	(13)
第Ⅲ- 6図 石室実測図 (1:60)	(15)
第Ⅲ- 7図 石室床面敷石・封鎖石・遺物出土状況実測図 (1:30)	(17)
第Ⅲ- 8図 古墳出土遺物実測図 (1) (1:3)	(19)
第Ⅲ- 9図 古墳出土遺物実測図 (2) (1:3, 1:6)	(21)
第Ⅲ- 10図 古墳出土遺物実測図 (3) (1:2)	(21)
第Ⅲ- 11図 西側集石実測図 (1:30)	(23)
第Ⅲ- 12図 西側集石出土遺物実測図 (1:3)	(23)
大平遺跡	
第IV- 1図 周辺地形図 (1:2,000)	(31)
第IV- 2図 造構配置図 (1:500)	(32)
第IV- 3図 SB 1・6 実測図 (1:60)	(34)
第IV- 4図 SB 2 実測図 (1:60)	(35)
第IV- 5図 SB 2 カマド実測図 (1:20)	(36)
第IV- 6図 SB 3 実測図 (1:60)	(36)
第IV- 7図 SB 3 内土坑実測図 (1:20)	(36)
第IV- 8図 SB 4 実測図 (1:60)	(38)
第IV- 9図 SB 5 実測図 (1:60)	(39)
第IV- 10図 SB 7 実測図 (1:60)	(40)
第IV- 11図 出土遺物実測図 (1) (1:3)	(43)
第IV- 12図 出土遺物実測図 (2) (1:3)	(44)
第IV- 13図 出土遺物実測図 (3) (1:3)	(45)
第IV- 14図 出土遺物実測図 (4) (1:3)	(46)

後山大平古墳

第V-1図 墓丘測量図 (1:60)	(53)
第V-2図 箱式石棺実測図 (1:30)	(55)
第V-3図 出土遺物実測図 (1:3)	(56)

表 目 次

札場古墳

第III-1表 調査区出土遺物(土器)観察表.....	(24)
第III-2表 調査区出土遺物(金属製品)観察表.....	(25)

大平遺跡

出土遺物観察表	(46・47)
---------------	---------

後山大平古墳

出土遺物観察表	(56)
---------------	------

図 版 目 次

札場古墳

図版1 a 遺跡遠景(北から)	f 石室掘方土層断面(A-A'、北側)
b 遺跡遠景(北西から)	(南東から)
c 調査前全景(南東から)	g 墓丘土層断面(B-B') (北東から)
図版2 a 墓丘検出状況(南東から)	h 石室掘方土層断面(B-B') (北東から)
b 墓丘南側石積(南西から)	図版4 a 石室・封鎖石及び遺物出土状況
c 墓丘北側列石(北東から)	(南東から)
図版3 a 南側周溝土層断面(A-A')(南東から)	b 封鎖石及び遺物出土状況(南東から)
b 墓丘土層断面(A-A')(南東から)	c 封鎖石及び遺物出土状況(東から)
c 墓丘土層断面(A-A'、南側)(南東から)	図版5 a 石室奥壁(南東から)
d 墓丘土層断面(A-A'、北側)(南東から)	b 石室床面(南東から)
e 石室掘方土層断面(A-A'、南側)	c 石室床面(北西から)
(南東から)	

- | | |
|----------------------|---------------------|
| 図版 6 a 石室南側壁（東から） | 図版 7 a 石室基底石（南東から） |
| b 石室北側壁（南から） | b 石室基底石（北側壁）（東から） |
| c 石室南側壁（中央部）（東から） | c 石室掘方（南東から） |
| d 石室北側壁（中央部）（南から） | 図版 8 a 西側集石（西から） |
| e 石室南側壁（奥壁寄り）（北東から） | b 西側集石内遺物出土状況（北西から） |
| f 石室北側壁（奥壁寄り）（南西から） | c 西側集石土層断面（西から） |
| g 石室奥壁奥込め状況（北側）（北から） | 図版 9 出土遺物 1 |
| h 石室奥壁奥込め状況（南側）（西から） | 図版 10 出土遺物 2 |
| | 図版 11 出土遺物 3 |

大平遺跡

- | | | | |
|---------------------|--------|--------------------|-------|
| 図版 12 a 遺跡遠景 | (南から) | 図版 16 a SB4 床面検出状況 | (北から) |
| b 遺跡近景 | (北西から) | b SB4 カマド検出状況 | (西から) |
| c 調査前全景 | (北から) | c SB4 完掘状況 | (北から) |
| 図版 13 a SB1 炭化材検出状況 | (西から) | 図版 17 a SB5 検出状況 | (西から) |
| b SB6 遺物出土状況 | (西から) | b SB5 床面検出状況 | (南から) |
| c SB1・6 完掘状況 | (西から) | c SB5 完掘状況 | (西から) |
| 図版 14 a SB2 検出状況 | (東から) | 図版 18 a SB7 床面検出状況 | (西から) |
| b SB2 炭化材検出状況 | (東から) | b SB7 カマド検出状況 | (西から) |
| c SB2 カマド検出状況 | (東から) | c SB7 完掘状況 | (西から) |
| 図版 15 a SB3 検出状況 | (東から) | 図版 19 出土遺物 1 | |
| b SB3 内土坑遺物出土状況 | (北から) | 図版 20 出土遺物 2 | |
| c SB3 床面検出状況 | (東から) | 図版 21 出土遺物 3 | |

後山大平古墳

- | | |
|-------------------|--------|
| 図版 22 a 古墳検出状況 | (西から) |
| b 箱式石棺蓋石検出状況 | (北から) |
| c 箱式石棺内検出状況 | (西から) |
| 図版 23 a 箱式石棺内検出状況 | (北から) |
| b 遺物出土状況 | (北東から) |
| c 古墳完掘状況 | (西から) |

- 図版 24 出土遺物

I はじめに

中国横断自動車道尾道松江線は、瀬戸内海沿岸の尾道市から三次市を経て日本海側の松江市に至る延長約137kmの高速自動車道である。山陽自動車道・中国自動車道・山陰自動車道及び西瀬戸自動車道と接続して中国・四国地方の広域的な交通ネットワークを形成し、沿線地域の産業・経済・文化の発展に重要な役割を果たすことを目的として計画された。

事業者である日本道路公団中国支社広島工事事務所（以下「道路公団」という。）は広島県教育委員会（以下「県教委」という。）に対して、平成13（2001）年7月、三次市四拾賀町から比婆郡口和町（現 庄原市口和町）にかけての予定路線内の文化財等の有無及び取扱いについて協議を始めた。

以下、札場古墳及び大平遺跡の調査に至る経過を分けて記述する。

札場古墳

平成15年8月、県教委は三次市四拾賀町から庄原市水越町の間の現地踏査を実施して札場古墳ほかを確認し、このことを道路公団に回答した。県教委及び三次市教育委員会（以下「市教委」という。）は道路公団とこれらの遺跡の保存について協議したが、保存できないとの結論に達した。そのため、県教委はこれらの遺跡等について発掘調査が必要である旨を道路公団に回答した。

これを受けて道路公団は、平成17年2月に文化財保護法第57条の3に基づく埋蔵文化財発掘通知を県教委に提出するとともに、発掘調査の実施を平成17年3月、財団法人広島県教育事業団埋蔵文化財調査室（以下「事業団」という。）に依頼した。

事業団は、平成17年4月に道路公団（平成17年10月から西日本高速道路株式会社中国支社）と委託契約し、平成17年11月21日から平成18年1月27日の間、発掘調査を実施した。

大平遺跡

平成17年8月、県教委は現地踏査を実施し、試掘調査が必要であることを道路公団に回答した。さらに平成19年1月に試掘調査を実施し、大平遺跡を確認した旨を道路公団に代わって事業主体となった国土交通省中国地方整備局三次河川国道事務所（以下「国土交通省」という。）に回答した。県教委及び市教委は国土交通省とこれらの遺跡の保存について協議したが、保存できないとの結論に達した。そのため、市教委は平成19年2月、これらの遺跡等について発掘調査が必要である旨を国土交通省に回答した。

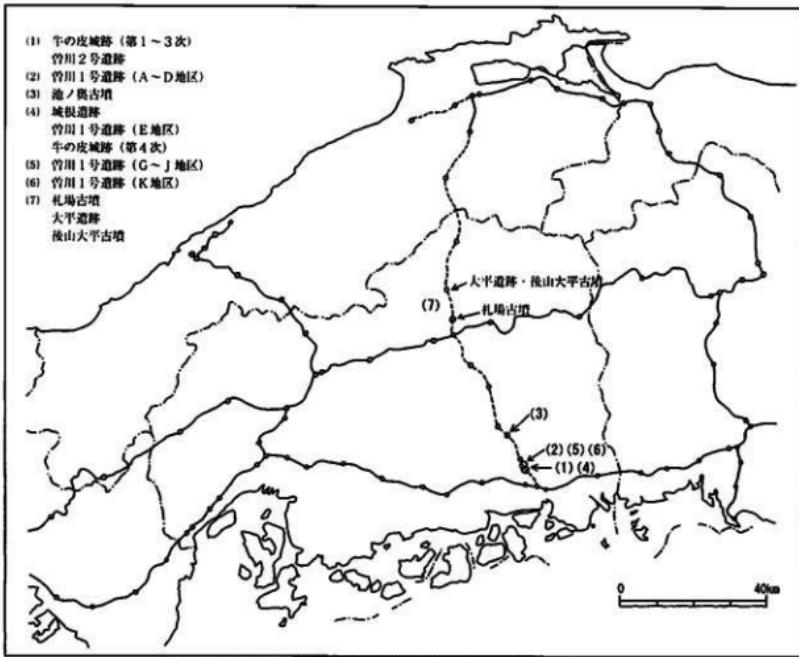
これを受けて国土交通省は、平成19年2月に文化財保護法第94条第1項に基づく埋蔵文化財発掘通知を市教委に提出するとともに、発掘調査の実施を平成19年2月、事業団に依頼した。

事業団は、平成19年6月に国土交通省と委託契約し、平成19年6月21日から平成19年10月5日の間、発掘調査を実施した。なお、調査の過程において大平遺跡内で古墳を確認したことから、この古墳の名称について、県教委が市教委と調整の上「後山大平古墳」とした。

本書は札場古墳及び大平遺跡・後山大平古墳の調査成果をまとめたものであり、今後の埋蔵文

化財の資料として、また、当該地域の歴史の一端を知る助けとなれば幸いである。

なお、発掘調査にあたっては、西日本高速道路株式会社中国支社広島工事事務所、国土交通省中国地方整備局三次河川国道事務所、三次市教育委員会及び地元の方々から多大なるご協力を得た。記して感謝の意を表します。



第1図 中国横断自動車道尾道松江線路線図<(1)~(7)は報告書番号>

第1回の報告書

- (1) 財團法人広島県教育事業団「牛の皮城跡 曾川2号遺跡 中国横断自動車道尾道松江線建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 (1)」 2005年
- (2) 財團法人広島県教育事業団「中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 (2) 曾川1号遺跡 (A~D地区)」 2006年
- (3) 財團法人広島県教育事業団「中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 (3) 池ノ奥古墳」 2007年
- (4) 財團法人広島県教育事業団「中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 (4) 城根遺跡 曾川1号遺跡 (E地区) 牛の皮城跡 (第4次)」 2008年
- (5) 財團法人広島県教育事業団「中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 (5) 曾川1号遺跡 (G~J地区)」 2008年
- (6) 財團法人広島県教育事業団「中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 (6) 曾川1号遺跡 (K地区)」 2008年
- (7) 財團法人広島県教育事業団「中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 (7) 札場古墳・大平遺跡・後山大平古墳」 2009年

II 位置と環境

札場古墳及び大平遺跡・後山大平古墳は広島県三次市後山町に所在する。三次市は広島県北部に位置し、平成 16 (2004) 年 4 月に双三郡の 6 町村（作木村・君田村・布野村・三和町・三良坂町・吉舎町）及び甲奴郡甲奴町と合併し、面積 778 平方キロメートル、人口は 6 万人を超える市となつた。

後山町は三次市の中央東部にあたり、標高 300 ~ 450 m 前後の山々が連なり、江の川の支流西城川に流れ込む小河川が谷部や平坦地を形成し、その平坦地を中心に集落が営まれている。なお、東は庄原市と接している。

次に、後山町では確認された遺跡は少ないことから、周辺の地域を含めて概観する。

旧石器時代～弥生時代 後山町内では旧石器時代・縄文時代の遺跡は確認されていない。

周辺地域の旧石器時代の遺跡としては、西酒屋町の下本谷遺跡^[1]が知られている。下本谷遺跡では始良丹沢降下火山灰より明らかに古い石器群が確認され、また縄文時代早期の土器も出土している。さらに、和知町・四拾貫町の和知白鳥遺跡や段遺跡^[2]からも旧石器が出土している。

縄文時代の遺跡としては、和知町河原田 2 号遺跡^[3]で縄文時代早期の押型文土器が、和知町下の割遺跡^[4]で晩期の土器が出土している。ともに遺構は不明である。

弥生時代は大平遺跡^[5]で後期後半の竪穴住居跡が検出されており、下の割遺跡で前期の土器が出土し、四拾貫町の四拾貫小原遺跡^[6]では中期後半の土坑墓 7 基が確認されている。また、庄原市平和町竜王堂遺跡^[7]で中期後葉から古墳時代前期にかけての集落跡が見つかっている。

古墳時代 古墳時代になると、後山町内でも数多くの古墳が確認されている。北部からあげると、後山米子古墳群（3 基）、後山久光古墳群（4 基）、後山中組古墳群（2 基）、大平遺跡の調査で見つかった後山大平古墳（1 基）^[8]、後山東古墳群（5 基）、上谷古墳群（3 基）、札場古墳（1 基）の合計 7 群（19 基）である。墳丘の大きさは概ね 6 ~ 15 m ほどの小型の円墳である。埋葬施設は不明なものが多く、横穴式石室は後山中組第 2 号古墳と札場古墳の 2 基が確認されている。

周辺地域の古墳をみると、四拾貫町・和知町周辺では、上四拾貫古墳群、四拾貫向山古墳群、同小原古墳群、同日南古墳群、同太郎丸古墳群、山家古墳群、国広山古墳群、国広古墳群など 300 基以上の古墳が確認されている。このうち上四拾貫古墳群（1・3 ~ 10 号墳）^[9]などでは発掘調査も実施されている。全体的に小規模な円墳が多く、埋葬施設は竪穴式石室・箱式石棺・粘土郭などで、横穴式石室は少ない。横穴式石室をもつ古墳には、国広山第 7 号古墳、四拾貫小原第 16 号古墳、山家第 13 号墳などがある。

庄原市西部の平和町・水越町・口和町では石仏北古墳群、西ヶ迫古墳群、流田山古墳群、流田古墳群、金田古墳群などがある。このうち横穴式石室をもつ古墳は石仏北第 1 号古墳、流田山第 3 号古墳、金田第 2 号古墳^[10]などが知られている。このうち金田第 2 号古墳の埋葬施設は全長約 5.5 m の無袖式の横穴式石室で、石室の内外から多数の須恵器、土師器、鉄製品、玉類などが出土した。

古墳時代の集落跡としては、大平遺跡で竪穴住居跡、和知白島遺跡や段遺跡などで当該期の遺構を確認した。また竜王堂遺跡でも竪穴住居跡を確認している。

古代～中世 古代の遺跡については、大平遺跡で竪穴住居跡を検出している。周辺地域での古代の遺跡としては向江田町の寺町廃寺跡³⁸や上山手廃寺³⁹など奈良時代の前半から後半にかけての寺院跡の存在が知られている。また、下本谷遺跡では奈良時代後半から平安時代初期にかけての整然と並ぶ掘立柱建物跡群が確認され、三次郡衙跡と考えられている。

中世の遺跡としては当該地域に勢力を有した三吉氏の畠敷町比叡尾山城跡、三次町比熊山城跡など数多くの城跡が残されている。このうち後山町では、久光城跡が確認されている⁴⁰。この山城跡は尾根を堀切で切断した単郭の城跡で、城主は三吉氏家臣の近安氏と伝えられている。

また、畠敷町では県道改良工事に伴って井上佐渡守土居屋敷跡⁴¹の発掘調査が行われ、堀切や井戸、柵列などが確認された。

註

- (1) 広島県教育委員会「下本谷道路第1～6次発掘調査概報」 1980～1985年
下本谷遺跡発掘調査団「下本谷道路一推定偏後国三次郡衙跡の発掘調査報告一」 1975年
三次旧石器文化研究会「下本谷遺跡の基礎的研究—三次市西酒屋配水池建設に伴う旧石器時代遺跡の調査から—」 2007年
- (2) 財團法人広島県教育事業団・広島県立歴史民俗資料館「中国横断自動車道尾道松江線建設事業に係る三次市域埋蔵文化財発掘調査報告書－資料－」 2007年
財團法人広島県教育事業団・広島県立歴史民俗資料館「中国横断自動車道尾道松江線建設事業に係る備北地区埋蔵文化財発掘調査報告書－資料－」 2008年
- (3) 財團法人広島県埋蔵文化財調査センター「河原田2号遺跡・寺の前古墓」 1992年
- (4) 財團法人広島県埋蔵文化財調査センター「上大綱古墳・下の削道跡」 1989年
- (5) 財團法人広島県教育事業団・広島県立歴史民俗資料館「中国横断自動車道尾道松江線建設事業に係る備北地区埋蔵文化財発掘調査報告書－資料－」 2008年
- (6) 四拾貫小原発掘調査団「四拾貫小原」 1969年
- (7) 財團法人広島県埋蔵文化財調査センター「竜王堂遺跡」 1994年
- (8) 註(5)と同じ。
- (9) 広島県教育委員会「上四拾貫古墳群」「中国横貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」(1) 1978年
- 00 財團法人広島県埋蔵文化財調査センター「金田第2号古墳発掘調査報告書」 1999年
- 01 三次市教育委員会「備後寺町廃寺—推定三谷寺跡第1～4次発掘調査概報—」 1980～1983年
- 02 広島県教育委員会「上山手廃寺発掘調査概報」(1)～(3) 1979～1981年
- 03 広島県教育委員会「広島県中世城館遺跡総合調査報告書」第4集 1996年
- 04 三次市教育委員会「井上佐渡守土居屋敷跡」 1998年



- 1 札塙古墳 2 大平遺跡・後山大平古墳 3 上谷古墳群 4 弘法谷北古墳群 5 弘法谷古墳群 6 ハチガ振城跡 7 四拾貫向山古墳群
 8 四拾貫日南古墳群 9 四拾貫太郎丸古墳群 10 四拾貫三重古墳群 11 殿道跡 12 実重池東古墳 13 和知白鳥遺跡
 14 殿古墳群 15 国広山谷古墳群 16 国広山城跡 17 上四拾貫遺跡 18 甲持龜古墳群 19 上四拾貫古墳群 20 歳致古墳群
 21 ~ 23 国広古墳群 24 雲満古墳群 25 尾越東古墳群 26 尾越中古墳 27 ~ 29 尾越古墳群 30 二ヶ山城跡 31 後山東古墳群
 32 西ヶ追古墳群 33 流田山古墳群 34 神田古墳群 35 黄金塚古墳 36 神山古墳群 37 石畠北古墳群 38 常追古墳群
 39 後山中組古墳群 40 久光城跡 41 後山久光古墳群

第2図 周辺遺跡分布図 (1:25,000)

三 札 場 古 墳



第三-1圖 地形図 (1:2,000)

III-1 調査の概要

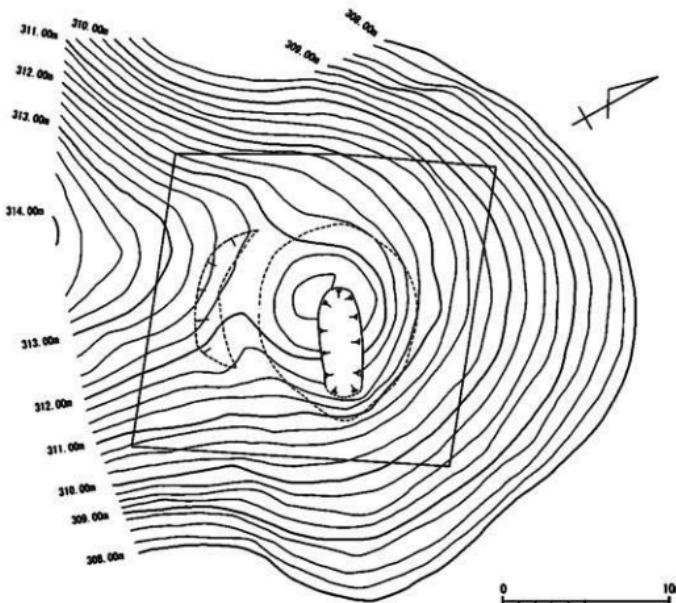
(1) 遺跡の状況 (第III-1図、図版1)

札場古墳は、三次市東北部の江の川水系西城川から南へ約3km山に入った。馬洗川に流れ込む四拾貫川との分水嶺近くの地点に立地する。古墳は、幅50mほどの狭い谷を東に望む南から北に延びる丘陵先端の緩やかな斜面に単独で築かれている。標高は約313m、周囲の水田からの比高は約25mである。

(2) 調査の方法・概要 (第III-2・3図、図版1・2)

調査前に地形測量を行い、直径9.5～12m、高さ0.6～1.5mの円墳と推定された。また、墳丘南西側(尾根の上方)で長さ約9m、幅約5m、深さ約0.5mの周溝が確認できた。墳丘上の中央部から東側にかけて長さ7m、幅2.5mの落ち込みがあり、試掘調査時にこの落ち込み内の南西側で、石の並びが確認されていた。この落ち込みの長軸を基準線にし、これと直交する線とで、土層観察用の十字の畦を墳丘上に設定し、この畦を残して表土の掘り下げを行った。

調査の結果、古墳は直径8～9m、現状の高さ1.2～1.5mの円墳であることが明らかになった。

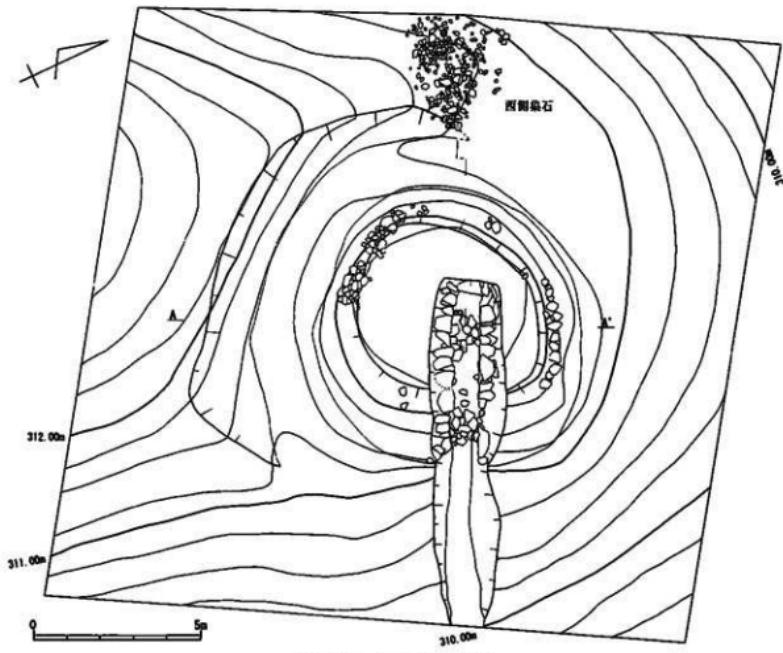


第III-2図 調査前地形測量図 (1:300) (□内は発掘調査範囲)

墳丘北側の中位に鉢巻状に石列がめぐり、南西側では葺石状の石積がある。そして、墳丘の南西側に上端幅4~5.5m、深さ0.6mほどの周溝を設けていた。

埋葬施設は南東に開口する無袖式の横穴式石室で、石室の天井石は全て失われ、両側壁の上部も一部が失われている。石室の規模は、奥行4.9~5.1m、幅0.9~1.1mで、高さは1.2~1.3mと推定される。奥壁は大型の一枚岩を縦長に使用し、両側壁は3~4段の石積みと思われる。床面には板石を並べた敷石が残っていた。石室内では敷石の際から耳環1点が出土している。石室入口部分で封鎖石の基底部が奥行1mにわたって残り、その南東側に墓道が斜面下方に延びている。石室入口部分から墓道にかけて、須恵器が比較的多く出土したほか、鐵鎌などが出土した。これらの出土遺物から、本古墳の造営や追葬の時期は6世紀第4四半期~7世紀前半頃と推定される。

なお、墳丘西側で約3.5m×3.2mの範囲に不整形にひろがる集石を検出した。10~35cm大の角礫がひろがり、積み重ねた様子はみられず、集石の下からは、遺構は確認されなかった。角礫の間から鐵刀1点が出土した。遺構の性格や時期は不明であるが、鐵刀の出土状況から古墓や祭祀に関係する遺構の可能性がある。



III—2 遺構と遺物

(1) 古墳の検出遺構と出土遺物

a 墓丘と周溝（第III-3～5図、図版2・3）

墳丘の規模は、東西約9m、南北約8mで、現状の高さは、南側周溝の底面から1.2m、石室床面から1.5m、北側墳裾から1.5mである。墳丘の南から西側にかけて葺石状の石積（以下「南側石積」という。）が、北西から北東にかけて列石（以下「北側列石」という。）が検出された。なお、南側から西側にかけて周溝がめぐっている。

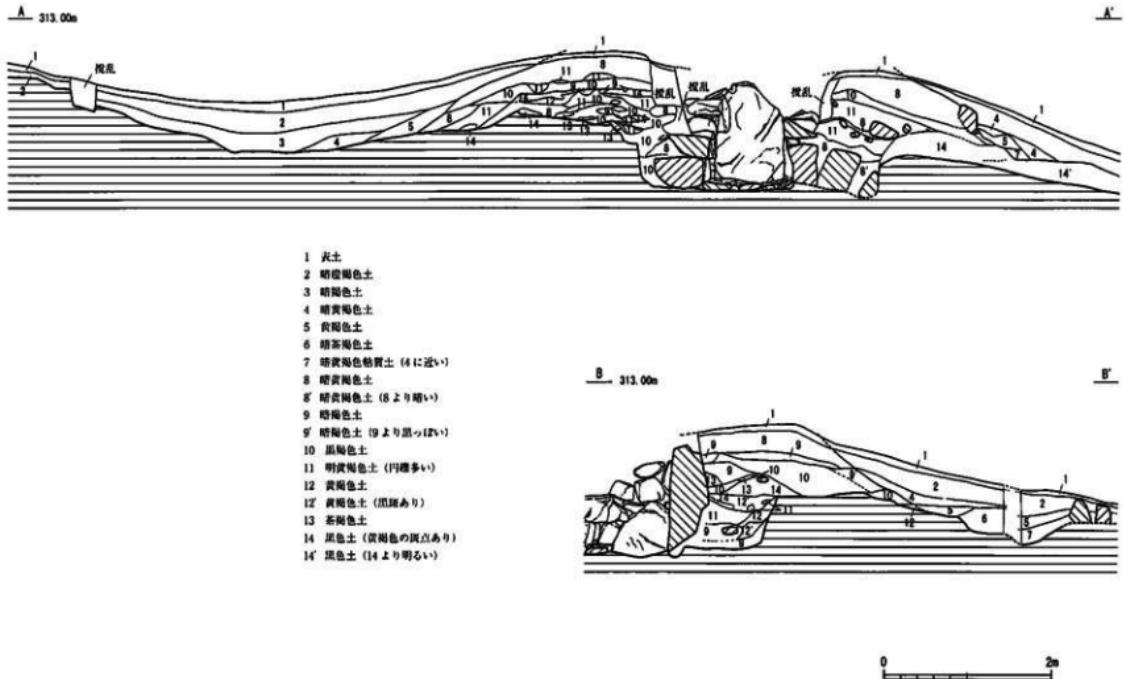
墳丘土層断面　南北方向の土層断面をA-A'、東西方向の土層断面をB-B'とした。

南北土層（A-A'）は石室を横断する方向である。土層断面を下方から順にみると次のとおりである。①石室掘方は、南側では地山面を、北側では地山の上の黒色土（14層）を掘り込み、石室を構築している。なお、北側壁の基底石は地山の自然石を幅1.8m×高さ0.9m×奥行き1.2mほどに加工して利用し、掘方の掘り下げは自然石の上面で止めている。南側では側壁の基底石の背後に黒褐色土（10層）を詰めている。側壁2段目の背後は、南側では暗黄褐色土（8層）と黒褐色土（10層）を積み、北側では明黄褐色土（11層）を厚く積んで、南北両側で掘方をほぼ埋めている。②側壁3・4段目にあたる部分の背後は、南側では暗黄褐色土・暗褐色土・明黄褐色土・黄褐色土・茶褐色土・黒色土（8・9・11～14層）の土がブロック状あるいはレンズ状に入る黒褐色土（10層）が掘方より南側に広がり、やや傾斜をつけて盛っている。一方、北側では暗黄褐色土（8層）をやや薄く、明黄褐色土（11層）をやや厚く交互に積んでいる。南北両側ともさらにその上に、黒褐色土（10層）を広い範囲に薄くやや傾斜をつけて盛っている。③天井石にかかると思われる部分は、南北両側で主に暗黄褐色土（8層）を広い範囲で傾斜をつけて盛っている。現状では30～40cmほどの厚さである。

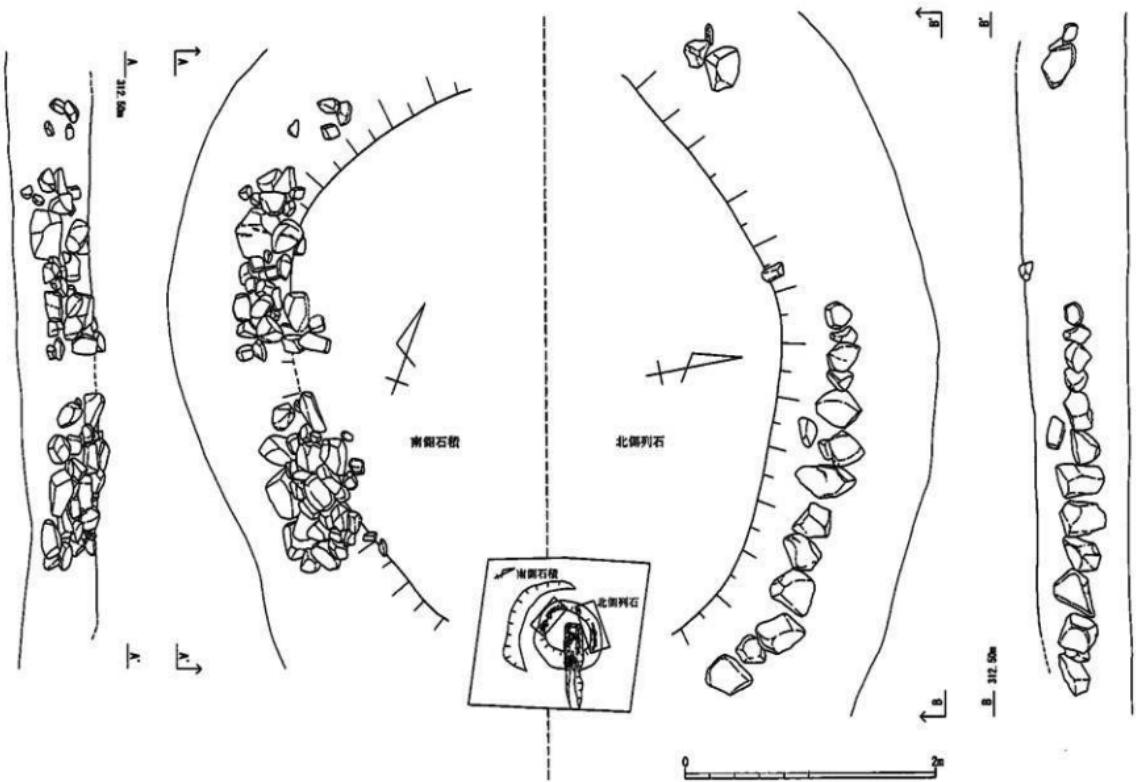
東西土層（B-B'）は石室の奥壁を切る方向である。①掘方は地山を掘り込み、奥壁を据えている。奥壁の背後にまず暗褐色土（9層）を詰め、その上に明黄褐色土・黄褐色土（11・12・12'層）を交互に積み、明黄褐色土・黒色土（11・14層）がブロック状に入り、掘方を埋めている。②奥壁の中位から上端近くにかけては、まず、黒褐色土・茶褐色土（10・13層）を間に挟み、黒色土・暗褐色土（14・9層）を積み、その上に黒褐色土（10層）を広く厚さ40cmほど盛っている。③天井石にかかると思われる部分は、南北土層（A-A'）と同様に、主に暗黄褐色土（8層）を広く傾斜をつけて盛っている。現状では30cmほどの厚さである。

なお、天井石より上部の墳丘は流失しているため、土層は不明であるが、暗黄褐色土（8層）に近い土をさらに上積みしていたと思われる。

南側石積　墳丘の南から西側にかけて長さ4mほどの範囲にある。石積の底辺は墳裾より10～20cm上にあり、10～40cm大の角礫を2～6段、高さ50cm程度積み重ねている。総じて下方に大きめの角礫を、上方に小さめの角礫を横位に積んでいる。現状では墳丘の上端付近まで積んでいるが、墳丘上部が欠失しているため、本来の高さは不明である。ただ、石積の一部が崩落し



第Ⅱ-4図 墓丘土層断面実測図 (1:60)



第三-5圖 墳丘南側石積・北側列石実測圖 (1:40)

たと思われる角礫が周溝の埋土中に多く散在していたため、ある程度墳丘の上方まで積んでいた可能性がある。また、墳丘西側の集石に、南側石積から抜かれた角礫が使われた可能性があることから、葺石状の石積が墳丘西側にもある程度広がっていた可能性がある。

北側列石 墳丘の北西から北東にかけて長さ5.7mほどの範囲にある。列石の底辺は墳裾より20～40cm上にあり、角礫を横一列に並べているが、北西側で幅2mにわたり一旦途切れている。角礫の大きさは15～50cm大で、南側石積より大きめのものを使っている。また、数段に積み重ねた様子はほとんどなく、置き方は横位や縦位で規則性が見られないなど、南側石積とは若干様子が違う。北側の墳丘裾付近でもこの列石から崩落したと考えられる角礫が散在しており、北側列石もさらに広くめぐっていた可能性がある。

周溝 南側から西側にかけてめぐっている。規模は、長さ約13m、上端幅4.0～5.5m、下端幅1.5～2.5m、深さ約0.6mである。埋土は2～7層でレンズ状に自然堆積した状況を示している。

b 石室（第三-6・7図、図版4～7）

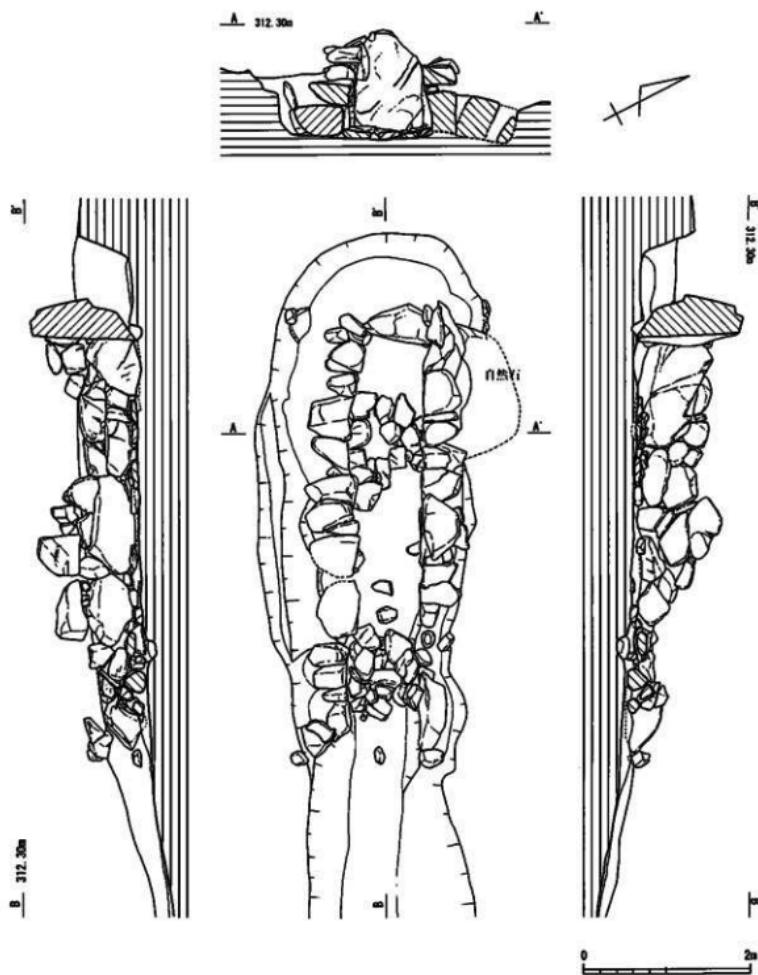
無袖式の横穴式石室で、主軸方向は磁北より約63°西に振り、南東方向に開口している。天井石および両側壁の上部は欠失していた。床面の一部に敷石が残り、石室の入口付近に封鎖石の基底部が残っている。玄室と羨道の区別は不明瞭であるが、封鎖石下の床面に、長さ75cm、幅30cm、深さ10cmほどの主軸方向に直交する溝があり、これを仕切りの溝とすれば（以下「仕切り溝」という）、仕切り溝より奥側が玄室、入口側が羨道となる。石室の現状の長さは南側壁が4.9m、北側壁が5.1m、幅は奥壁で0.9m、奥壁から12m付近で1.05m、封鎖石付近で0.9mである。ちなみに、奥壁から仕切り溝の中央までの長さが約3.7mであり、玄室の長さは3.7m前後、羨道は1.2～1.4mと考えられる。床面での平面プランは、北側壁は直線的、南側壁は中央部がわずかに外側に張り出しており、胴張り気味の長方形となっている。

天井石 調査時においては全て欠失しており、天井石の枚数・大きさ・形状は不明である。

奥壁 長さ1.3m、幅0.9m、厚さ0.3～0.5mの菱形状の板石を縦長に使っている。床面に長さ30cm、幅20m、深さ10cmほどの主軸方向に直交する溝を掘り、そこに板石をほぼ直立気味に据えている。その際、板石を北側壁の自然石を利用した基底石に寄りかけ、さらに南側壁の基底石を設置して奥壁の板石を固定している。そのためか、奥壁の面が主軸方向に直交せず、やや南側に向いている。なお、床面から奥壁の上端までの高さが約1.2mであり、天井石を奥壁の上端近くで架けていたと仮定すれば、玄室の高さは1.2～1.3m程度と推定される。

側壁 南側壁は長さが4.9mである。玄室の基底石は、横幅70～120cmの大きめの石4個を横位に、横幅10～20cmの小さめの石2個を縦位に並べ、羨道の基底石は、横幅50～75cmの石2個を横位に並べており、玄室の方が大きめの石を使っている。いずれの基底石も広口面を揃え、基底石の安定化のために下側の隙間に角礫を詰め、上側の隙間に角礫を詰めて上面の高さを合わせようとしている。基底石の高さは0.4～0.7mで、奥側の基底石の高さが低い部分では、その石の上に横幅50～75cmほどの板石を積んで上面を合わせようとしている。玄室の2段目（一部3段目）

では長さ 30 ~ 75 cm の石を横積みし、主に小口面を玄室内に向けている。なお、狭道の南側壁の南東端から墳丘に伴う外護列石状に、横幅 15 ~ 30cm ほどの角礫 3 個を南方向に並べている。



第三-6図 石室実測図 (1:60)

北側壁は長さが5.1mで、南側壁よりやや長い。玄室の基底石は、奥壁側の自然石を除き、横幅55～70cmの石3個を横位に、横幅30cmほどの石1個を縦位に並べ、羨道の基底石は、横幅1.0mの石1個を横位に置いている。玄室では、自然石以外はやや小さめの石を使い、羨道で大きめの石を使っている。いずれの基底石も広口面を揃えており、南側壁と同様に基底石の安定化のために下側の隙間に角礫を詰めているものがある。基底石の高さは自然石を除いて30～40cmで、基底石の上に2段目として25～75cm大の石を積んで隙間に角礫を詰め、自然石の上面の高さに合わせようとしている。玄室の3段目は長さ75cmほどのものを横積みしている。

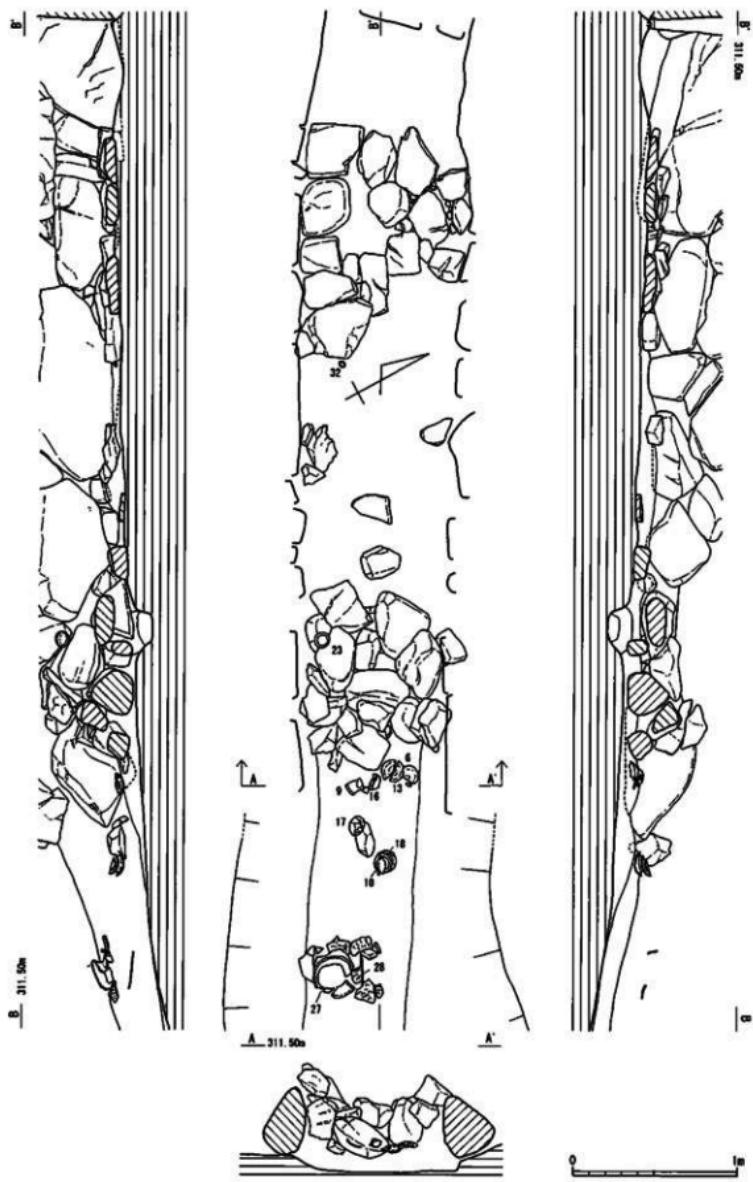
なお、南北両側壁の傾斜の度合いは、どちらもわずかに持ち送りになっている。また、南北両側壁とも羨道の2段目以上は欠失している。

床面 床面はほぼ平坦となった地山面である。玄室内の一部で敷石が残り、石室入口部に封鎖石の基底部が残っている。敷石の範囲は、幅が玄室の幅一杯(1.05m)、奥行が南側壁際で奥壁から0.6～2.1m、北側壁際で奥壁から0.7～1.5mである。長さ20～40cm、厚さ10cm前後で長方形状の板石を丁寧に敷き詰め、その隙間に円礫や角礫を詰めている。敷石の中央部や北側壁付近の空間は後世に剥がされたものと考えられ、元来敷かれていた可能性がある。そうすると玄室奥側に少なくとも1.5m×1.05mほどの範囲で敷石が設けられたと考えられる。なお、敷石と封鎖石の間に南側壁寄りで3箇、北側壁寄りで1箇、封鎖石寄りで2箇板石が点在している。これらは、長さ15～30cm、厚さ5～10cmで長方形状の板石である。床面に接しており元来の位置を留めているようにみえるが、規則性がみられないことから、後世に敷石からの移動した可能性もある。

玄室床面では耳環(32)1点が敷石の入口寄りの板石の側面に接して出土した。そのほかの遺物は出土しておらず、追葬時にかき出されたか、後世の盗掘時に持ち出されたようである。

封鎖石 仕切り溝の上部で、羨道の幅一杯(1.0m)、奥行1.15mの範囲に設けている。基底部が残っており、最も低い位置からの現状の高さは、南側壁付近が60cm、中央部が40cm、北側壁付近が55cmで、正面からみると「U」字状になっている。石材の角礫は20～40cm大で、最初に中央部に大きめの石を置き、そのまわりにやや大きめの石を積み、さらにその上に小さめの石を積んでおり、断面形は山形である。元来は、より上方まで積まれていたと思われる。調査時に墳丘東側斜面で比較的多く出土した角礫は、後世の盗掘時に取り除かれた封鎖石の一部と思われる。

なお、封鎖石の周辺では遺物がまとまって出土した。出土状況を細かくみると、封鎖石から東側の墓道にかけて3か所のまとまりがある。1か所目は封鎖石のまわりで、封鎖石の角礫の間から須恵器杯蓋(6の一部)が出土し、南側壁寄りの封鎖石上端で土師器杯(23)が完形で出土した。また、封鎖石の直ぐ東側で須恵器杯蓋(6の一部)・杯身(13)が伏せて、須恵器杯蓋(9)・杯身(16)が上向きで出土した。2か所目は、封鎖石から30cm東側の長さ20cmほどの角礫のまわりで須恵器杯身(17)が伏せて、須恵器杯蓋(10)・杯身(18)が上向きで重なって出土した。3か所目は、封鎖石から1mほど東側で須恵器甕(27)が口縁部を上方にして立てたものが潰れた状態で出土した。なお、須恵器甕(27)の下から須恵器杯蓋(5)・鉄錠(28)が出土した。



第三-7圖 石室床面敷石・封堵石・遺物出土状況実測図 ※数字は遺物番号 (1 : 30)

これらを見ると、須恵器杯蓋・杯身などが玄室内からかき出された後に、封鎖石が作られ、その上に土師器杯が置かれている。また、2か所目の須恵器杯蓋・杯身あるいは3か所目の須恵器壺は封鎖石の設置に伴って置かれた可能性がある。なお、須恵器壺の下の須恵器杯蓋や鉄錆は封鎖石設置前に玄室内からかき出されたものと考えられる。このように封鎖石周辺の出土遺物は、封鎖石の設置前のものと設置後のものとの2時期のものがある。

c 石室掘方と墓道（第III-3・4・6図、図版3・7c）

石室掘方 南北土層（A-A'）をみると、北側では地山直上の黒色土（14層）から掘り込んでいるが、南側では黒色土（14層）がほとんど無く、地山面から掘り込んでいる。このことから、最初に丘陵尾根の緩斜面（旧地表面）の高所をある程度削平して平坦にし、次に、断面逆台形に掘り込んだものと思われる。なお、北側壁の西端付近は、基底石に加工した自然石を残して掘っている。掘方の長さは約6.5m、幅は奥壁付近で約2.5m、自然石の南側で約2.6m、封鎖石付近で2.0～2.1mで、入口部が狭く、隅丸の羽子板形をしている。深さは奥壁付近で約0.8m、封鎖石付近で約0.6mである。床面には奥壁の設置のための溝や仕切り溝を主軸方向に直交するように掘り下げている。床面の横断面は両端より中央部分がやや低く、「U」字状に凹んでいる。さらに、奥壁下の溝付近は仕切り溝付近より約20cm高く、石室の奥側から入り口部に向けて緩やかに傾斜している。封鎖石付近では側壁の基底石を設置するため、5～10cmほどの低い段を設けている。また、南側の上端の直下に幅20cmほどの狭い平坦面を長さ3.2mにわたって作り出している。

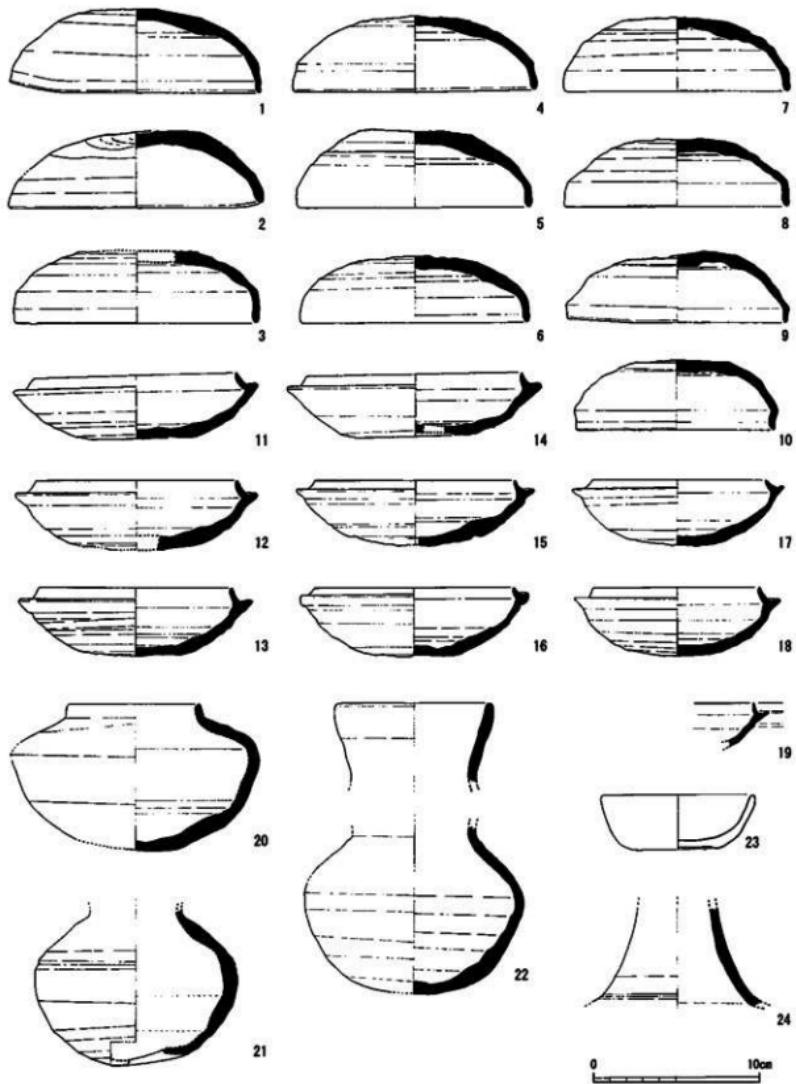
墓道 掘方からつながる墓道がほぼ直線的に古墳の東側斜面に延びている。長さは約5mで、調査区外の斜面下方にさらに延びる可能性がある。墓道の上端幅は広い部分で約2m、下端幅は0.6～1.0mで、下端幅は石室寄りが狭く、斜面下方で広くなる。深さは封鎖石付近が0.6mで、斜面下方で徐々に浅くなる。埋土は黒色土が厚く堆積し、須恵器などが多く出土した。ほとんどが玄室からかき出されたものと思われるが、埋土の上層で封鎖石の設置に伴うように置かれた土器がある。このことから、墓道は古墳造営時に同時に掘られた後、古墳の使用期間にほとんど埋まつたと思われる。なお、墓道の機能としては、古墳に通じる通路や古墳からの排水溝が考えられる。

d 出土遺物（第III-8～10図、第III-1・2表、図版9～11）

遺物は須恵器（杯蓋・杯身・壺・壺など）、土師器（杯）、金属製品（鉄錆・鋸・耳環など）が出土した。主に封鎖石の周辺やその東側の墓道から須恵器片が多く出土し、また、墳丘東側の表土からも須恵器片が数点出土した。石室入口の表土下で近世と思われる磁器片が出土しており、近世以降に古墳の一部が破壊されて石室内の遺物や敷石が攪乱を受けた可能性がある。

須恵器（1～22、24～27）

杯蓋（1～10） 口径は11.8～15.3（推定）cm、器高は4.1～5.0cmである。いずれもやや平坦な天井部から緩やかに湾曲し、口縁部はほぼ直立し、口縁部は丸くしている。9・10は口縁部直上に明瞭な屈曲がある。2はゆがみが大きいものである。天井部の調整は、回転ヘラキリのあと



第三~6圖 古墳出土遺物実測図(1) (1:3)

ナデついているものが多い。色調は基本的には灰色で、それに褐色を帯びるものが多い。9・10は黒色斑点が内外面にみられる。

杯身 (11～19) 口径 10.1～13.0cm、受部径 12.5～15.5cm、器高 3.9～4.2cm である。底部はやや平坦で緩やかに立ち上がり、受部の端部は丸くしている。11～13 のたちあがりは直線的に内傾し、1cm 前後伸び、端部は丸くしている。14～19 のたちあがりは反り上がり気味に内傾し、0.7～1.0cm 前後伸び、端部は丸いがやや尖り気味である。16 はゆがみの大きいものである。底部外面の調整は、回転ヘラキリのあとナデと思われるものがみられる。色調は基本的には灰色で、それに褐色を帯びるものが多い。16・19 は黒色斑点が内外面にみられる。

壺 (20～22・26) 20 は短頸壺である。頸部は短く立ち上がり、端部は丸くしている。胴部上位に直径 11.2cm の重ね焼きの痕跡が残る。21 は口頸部が欠失した胴部から底部で、短頸壺の可能性がある。胴部中位に沈線を 2 条施し、底部には焼成後に直径 2.2cm の円孔を内側から外側に向けて穿っている。22 は直口壺で、頸部は直線的に外傾し、端部は丸くしている。推定器高は 14.3cm である。底部内面に直径 1.8cm 程度の円形工具の圧痕が残る。焼成は不良で、軟質である。20～22 の底部は丸く、ヘラケズリ調整している。26 は口頸部及び胴部半分を欠失した壺である。底部がやや平坦で胴部は内湾気味に立ち上がり、平瓶の形態に似ている。胴部中位から上位にかけて横方向のカキ目調整を施している。底部内面に指頭圧痕がよく残っている。

口縁部 (25) 直線的に外傾し、端部は丸くしている。口径 8cm ほどで、壺・平瓶・提瓶などの口縁部と思われる。26 の口縁部の可能性がある。

脚部 (24) ラッパ状に長く開くもので、下位に沈線を 1 条施している。高杯の脚部と思われる。

壺 (27) やや大形のもので、底部を欠失している。胴部は長円形で、頸部は「く」の字に屈曲し、短く外反する。口縁端部は外側が肥厚し、強いナデで凹凸がみられる。胴部外面は継方向の平行タタキ目の上に横方向のカキ目調整を行い、内面は同心円のタタキ目が残っている。

土師器 (23)

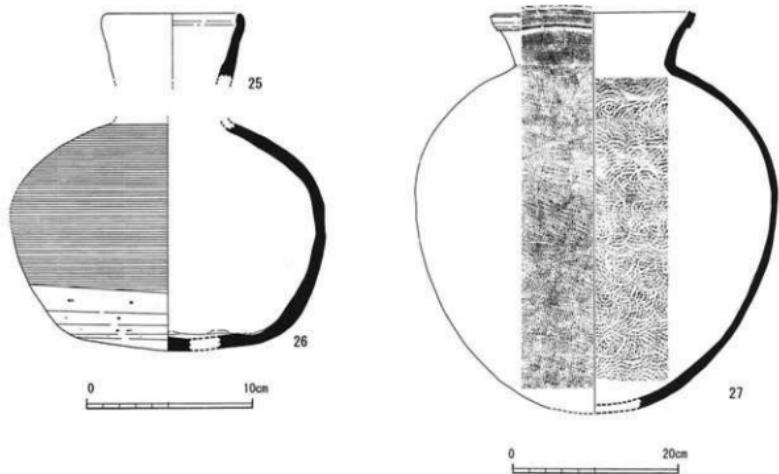
杯 (23) 底部は平坦で、体部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁端部は丸くしている。内面はやや丁寧に、外面は粗くヨコナデしている。

金属製品 (28～33)

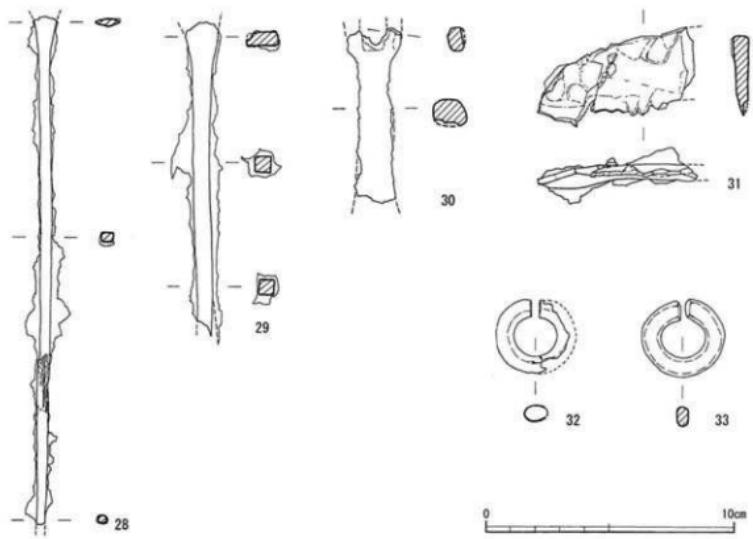
鉄鎌 (28) 両端が欠失している。鎌身部には関部が無く、徐々に広がっている。頸部と茎部の間の間は、鋸のため不明であるが、下端寄りで木質が遺存しており、その上方が関部と考えられ、長い頸部をもつ長頸鎌群に入る⁽¹¹⁾が、鎌身部の形状が不明のため、細部の分類は不明である。

棒状鉄製品 (29・30) 29 は両端が欠失した棒状の鉄製品で、上端はやや広がって断面が長方形であり、中位・下端の断面は方形である。用途は不明である。30 も両端が欠失した棒状の鉄製品で、上端に直径 2.3cm 程度の環がつくと思われる。環の部分の断面は梢円形である。棒状の部分はやや太めで、断面は梢円形である。馬具の轡の引手または銜である可能性がある。

鋸 (31) 長方形状の鉄板の一端に短い柄を受けた鋸の一部と考えられる。鋸歯が鉄板の片側につく「片歯」のもので、鋸歯の形は二等辺三角形の「素歯」⁽¹²⁾である。鋸歯が交互に外方に反る、



第三-9圖 古墳出土遺物実測図(2) (1:3, 1:6)



第三-10圖 古墳出土遺物実測図(3) (1:2)

いわゆる「アサリ」がみられる。鋸歯は3本遺存しており、その他は欠失している。鋸歯の高さは0.2~0.3cm、鋸歯の間隔は0.4~0.5cmである。茎部は長さ2cmほどで短く、鋸身と方向が違っている。茎部と鋸身との間に深い抉りがある。背は緩やかに湾曲している。目釘穴はなく、木柄の痕跡もみられない。

耳環(32) 銅芯が無く、中空である。部分的に金箔が遺存している。断面は縦長の楕円形である。外径は3.0cm×3.2(推定)cm、厚さは0.7cm×1.0cm、現状の重さは2.6gである。

環状金属製品(33) 銅芯があり、表面に鍍金はみられない。断面は横長の楕円形で表裏両面が平坦である。外径3.2cm×3.4cm、厚さ0.5cm×0.8cm、重さ21.4gである。

(2) その他の検出遺構と出土遺物

a 西側集石(第III-11図、図版8)

墳丘の西側に不整形に広がる集石で、規模は東西約3.5m、南北約3.2mである。集石は北西方に向に緩やかに下がっており、高所と低所との高低差は約0.5mである。角礫は10~35cm大で、大きめの石が点在し、その間に小さめの石が広がっている。規則的に並べた様子や積み重ねた様子はみられない。なお、一部の角礫が古墳の周溝上にあり、周溝より新しいものと考えられる。集石の下は厚さ20cm前後の暗褐色土で、その下が地山となる。地山面では遺構は検出されなかった。鉄刀1点が角礫の間に挟まれて出土したほか、覆土や周辺の表土から煤の付着した土師器あるいは土師質土器の壺あるいは鍋の細片が数点出土した。集石の時期は周溝との切り合いから、古墳時代後期以降と思われる。性格については鉄刀の出土状況から古墓あるいは祭祀関係の遺構の可能性がある。

b 出土遺物(第III-12図、第III-2表、図版11)

金属製品(34)

鉄刀(34) ほぼ完形で、全長36.6cmである。両闇を有し、ほぼ直角である。刀身部の棟はほぼ直線で、刃も直線的で刃幅を徐々に狭め、切先は緩やかに湾曲する。茎部の刀身部寄りに直径0.6cmほどの目釘穴を有する。刀身部の両闇付近に木質が遺存している。また、木質付近でのさびの違いから合口式の鞘と柄であった可能性がある。刀身部の長さは26.1cm、最大幅は2.8cm、棟の厚さは0.7cmである。茎部の長さは10.5cm、最大幅は2.2cm、厚さは0.7cmである。

註

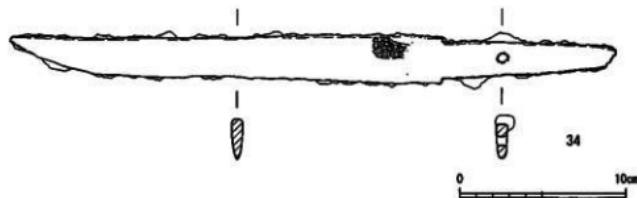
(1) 杉山秀宏「古墳時代の鉄器について」『櫻原考古学研究所論集』第八 株式会社吉川弘文館 1988年

(2) 鋼の形態・分類・用語などについては、次の文献による。

伊藤実「日本古代の鋸」『考古論集－潮見浩先生退官記念論文集－』潮見浩先生退官記念事業会 1993年



第Ⅲ-11圖 西側集石実測図 (1:30)



第Ⅲ-12圖 西側集石出土遺物実測図 (1:3)

第三-1表 調査区出土掲載遺物(土器)観察表

* 単位はcm. 準の()は復元推定値。器高の()は現状値。

番号	種別・器種	計測値*			調査	色調	紹介	出土地点	備考
		口径	最大径	底径					
1	灰陶器 杯型	15.1	-	-	5.0 外面: 回転ヘラキリ後ナデ。ヘラケズ リ、回転ナデ 内面: 回転ナデ	暗灰色。一部青灰色 内面: 暗灰色。褐色味を帯びる	砂粒多 含	既述北東側 埋土	ゆがみ有り
2	灰陶器 杯型	(15.3)	-	-	(4.7) 外面: 回転ヘラキリ後ナデ。ヘラケズ リ、回転ナデ 内面: 回転ナデ、仕上げナデ	暗灰色。一部青灰色 内面: 暗灰色。褐色味を帯びる	砂粒多 含	既述北東側 埋土	表面にへたりの痕跡 多い ゆがみ大きい
3	灰陶器 杯型	(14.5)	-	-	(4.4) 外面: 回転ヘラキリ後ナデ。ヘラケズ リ、回転ナデ 内面: 回転ナデ	暗灰色 内面: 暗灰色。褐色味を帯びる	砂粒含 む	既述北東側 埋土	ゆがみ有り
4	灰陶器 杯型	14.5	-	-	4.6 外面: 回転ヘラキリ後ナデ。ヘラケズ リ、回転ナデ 内面: 回転ナデ	暗灰色~灰黑色。褐色味を帯びる 内面: 暗灰色。褐色味を帯びる	砂粒含 む	既述北東側 埋土	表面にへたりの痕跡 多い ゆがみ有り
5	灰陶器 杯型	13.9	-	-	4.7 外面: 回転ヘラキリ後ナデ。ヘラケズ リ、回転ナデ 内面: 回転ナデ、仕上げナデ	暗灰色 内面: 暗灰色。褐色味を帯びる	砂粒多 含	既述埋土 (裏)(27)の 下)	ゆがみ有り
6	灰陶器 杯型	13.5	-	-	4.1 外面: 回転ヘラキリ後ナデ。ヘラケズ リ、回転ナデ 内面: 回転ナデ、仕上げナデ	灰白色 内面: 暗灰色	砂粒多 含	既述埋土	
7	灰陶器 杯型	13.4	-	-	4.4 外面: 回転ヘラキリ後ナデ。ヘラケズ リ、回転ナデ 内面: 回転ナデ	灰白色 内面: 暗灰色	砂粒少 含	既述北東側 埋土	
8	灰陶器 杯型	13.4	-	-	4.1 外面: 回転ヘラキリ後ナデ?。ヘラケ ズリ?、回転ナデ 内面: 回転ナデ、仕上げナデ	暗灰色 内面: 暗灰色。褐色味を帯びる	砂粒含 む	既述北東側 埋土	
9	灰陶器 杯型	13.2	-	-	4.3 外面: 回転ヘラキリ後ナデ?。ヘラケ ズリ?、回転ナデ 内面: 回転ナデ、仕上げナデ	暗灰色~暗灰色 内面: 暗灰色。褐色味を帯びる	砂粒多 含	既述埋土 (裏)	外面上に墨色斑点有 り
10	灰陶器 杯型	11.8	-	-	4.2 外面: 回転ヘラキリ後ナデ?。ヘラケ ズリ?、回転ナデ 内面: 回転ナデ、仕上げナデ	暗灰色 内面: 暗灰色	砂粒多 含	既述埋土	外面上に墨色斑点有 り ゆがみ有り
11	灰陶器 杯身	(12.2)(14.9)	-	-	4.0 外面: 回転ナデ、ヘラケズリ、底部削 除?ヘラキリ後ナデ? 内面: 回転ナデ、仕上げナデ	青灰色。褐色味を帯びる 内面: 青灰色	砂粒多 含	既述北東側 埋土	
12	灰陶器 杯身	(12.1)(14.7)	-	-	4.2 外面: 回転ナデ、ヘラケズリ、底部削 除? 内面: 回転ナデ、仕上げナデ	暗灰色~灰褐色 内面: 暗灰色	砂粒多 含	既述北東側 埋土	
13	灰陶器 杯身	11.6	14.2	-	4.1 外面: 回転ナデ、ヘラケズリ、底部削 除? 内面: 回転ナデ、仕上げナデ	青灰色。褐色味を帯びる 内面: 青灰色。褐色味を帯びる	砂粒多 含	既述埋土	
14	灰陶器 杯身	13.0	15.5	-	3.9 外面: 回転ナデ、ヘラケズリ、底部削 除?ヘラキリ後ナデ? 内面: 回転ナデ、仕上げナデ	青灰色。褐色味を帯びる 内面: 青灰色。褐色味を帯びる	砂粒含 む	既述北東側 埋土	
15	灰陶器 杯身	(12.2)(14.4)	-	-	4.0 外面: 回転ナデ?、底部削除?ヘラキ リ後ナデ? 内面: 回転ナデ、仕上げナデ	暗灰色 内面: 暗灰色。褐色味を帯びる	砂粒多 含	既述北東側 埋土	
16	灰陶器 杯身	12.1 ~ 13.0	13.9 14.7	-	4.2 外面: 回転ナデ、ヘラケズリ、底部削 除?ヘラキリ後ナデ? 内面: 回転ナデ、仕上げナデ	暗灰色。褐色味を帯びる 内面: 暗灰色	砂粒多 含	既述埋土 (裏)	外面上に墨色斑点有 り ゆがみ大きい
17	灰陶器 杯身	10.5	12.9	-	4.0 外面: 回転ナデ、ヘラケズリ、底部削 除?ヘラキリ後ナデ? 内面: 回転ナデ、仕上げナデ	暗灰色。褐色味を帯びる 内面: 青灰色	砂粒多 含	既述北東側 埋土	
18	灰陶器 杯身	10.1	12.5	-	4.1 外面: 回転ナデ、ヘラケズリ 内面: 回転ナデ?	暗灰色~墨灰色 内面: 暗灰色	砂粒多 含	既述埋土	
19	灰陶器 杯身	-	-	-	(2.7) 外面: 回転ナデ? 内面: 回転ナデ?	暗灰色 内面: 暗灰色	砂粒含 む	既述北東側 埋土	外面上に墨色斑点有 り
20	灰陶器 壺形瓶 口部~底部	7.2 ~ 7.9	15.0	-	8.9 外面: 回転ナデ、ヘラケズリ、ナデ? 内面: 回転ナデ?	暗灰色 内面: 暗灰色	砂粒含 む	石室入口付 近中層	脚部上位にねじ巻き した痕跡(直徑 11.2cm)
21	灰陶器 壺 脚部~底部	-	12.3	-	(9.6) 外面: 回転ナデ、ヘラケズリ 内面: 回転ナデ?	暗青灰色 内面: 暗青灰色。褐色味を帯びる	砂粒含 む	石室入口付 近中層	脚部中位に捻出2条 成形穿孔(直徑 2.2cm)
22	灰陶器 壺 口部~底部	(9.2)	13.3	-	- 外面: 回転ナデ、ヘラケズリ、ナデ? 内面: 回転ナデ、円形底?	暗灰~暗灰色 内面: 暗白~暗灰色	砂粒少 含	既述表土 (南東側)	
23	土器器 杯	9.0	-	5.0	3.4 外面: ヨリナデ? 内面: ヨリナデ	褐色 内面: 褐色	砂粒含 む	脚部上部	
24	灰陶器 壺	-	-	-	(6.1) 外面: 回転ナデ 内面: 回転ナデ	暗灰色 内面: 暗白色	砂粒含 む	既述北東側 埋土	外面上位に捻出2条 成形穿孔(直徑 2.2cm)
25	灰陶器 口縁部	(8.0)	-	-	(4.0) 外面: 回転ナデ 内面: 回転ナデ	暗灰色 内面: 暗灰色	砂粒含 む	既述表土 (北東側)	
26	灰陶器 壺 脚部~底部	-	19.2	-	(13.8) 外面: カニ目、ヘラケズリ 内面: 回転ナデ、相付の底	暗青灰色~灰褐色。水味有 り 内面: 明青灰色。褐色味を帯びる	砂粒少 含	既述表土 (南東側)	
27	灰陶器 壺 口部~底部	23.9	44.2	-	(47.9) 外面: 回転ナデ、開口タマキ 内面: 回転ナデ、開口タマキ	暗灰色。褐色味を帯びる 内面: 暗白色。褐色味を帯びる	砂粒多 含	既述表土	

第三-2表 調査区出土掲載遺物（金属製品）観察表

* 長さ・最大幅・厚さの単位はcm. 重さの単位はg. ()は現状値

番号	種別・器種	計測値*				出土地点	備考
		長さ	最大幅	厚さ	重さ		
28	鉄製品 鉄盤	(20.6)	(1.0)	0.4	(20.0)	隔離壁土 (須恵器甕(27)の7cm下)	上端・下端欠失、長頸瓶群 基部に本質遺存
29	鉄製品 棒状鉄製品	(12.7)	(1.3)	0.6	(41.7)	石室入口付近北側中層	上端・下端欠失 用途不明
30	鉄製品 棒状鉄製品	(7.1)	(2.3)	1.1	(18.2)	石室入口付近北側中層	上端・下端欠失(上端が壊状) 用途不明(馬具?)
31	鉄製品 劍	(6.4)	(3.2)	0.6	(25.0)	石室入口付近北側中層	鍔衛の高さ0.2~0.3cm 鍔歯の間隔0.4~0.5cm
32	金属製品 耳環	3.0×3.2(推定)		0.7 ×1.0	(2.6)	石室南西側床面近く (焼石側面に接する)	鋼芯が無く、中空になっている 推定最大幅3.2cm
33	金属製品 環状金属製品	3.2×3.4		0.5 ×0.8	21.4	石室入口付近埋土	メッキ無し
34	鉄製品 鉄刀	36.6	2.8	0.7	244.2	西侧鑿石内	刀身部に木質遺存 基部に目釘穴(直径0.6cm)

III-3 まとめ

調査の結果、横穴式石室をもつ円墳を検出した。また、古墳の西側で性格不明の集石を検出した。ここでは、古墳の墳丘・石室・出土遺物について検討し、まとめとしたい。

(1) 墳丘について

本古墳は直径8~9m、現状の高さ1.2~1.5mの円墳で、南西側（尾根の上方）に幅4.0~5.5mの周溝を設けている。土層断面の観察などから墳丘の構築は次のとおりと考えられる。①横穴式石室を構築するための長方形の穴を掘り、基底石を組み、一部2段目の側壁の石を積みながら裏込めの土を詰める。②3・4段目の側壁の石を積みながら、その裏側に掘方より広い範囲で盛り土を行う。③天井石を架け、天井石上を含むさらに広い範囲で盛り土を行い、墳丘を作る。

墳丘の南側で葺石状の石積、墳丘の北側で列石を検出した。いずれも墳丘の中位に作られている。墳丘の列石や石積については、庄原市口和町池津第1号古墳の発掘調査報告書で分類されており、本古墳の例は「A-3類（墳丘中段をめぐるもの）」に該当する⁽¹⁾。県内での類例は本古墳も含めて28例で、そのうち17例が江の川水系に所在しており⁽²⁾、県内の他地域に比べて比較的よくみられるようである。なお、墳丘の列石や石積の機能は、「外表の装飾」や「盛り土の流失防止」が考えられている⁽³⁾。

(2) 石室について

横穴式石室は無袖式で、奥行4.9~5.1m、幅0.9~1.1mの小型の石室である。玄室の長さは約3.7mと推定される。天井石や側壁の上部は欠失しているが、玄室の高さは1.2~1.3mと推定される。床面には敷石が、入口付近には封鎖石の基底部が残っていた。

敷石は石室奥壁寄りに奥行き0.7~1.5m、幅1.05mの範囲にあり、板石を使っている。県内の敷石の類例は、須恵器敷床の横穴式石室墳21例のうち8例が平石敷でもあり、そのうち7例は江の川流域である⁽⁴⁾。本古墳は床面に須恵器を伴っていないため概には言えないが、江の川流域に位置しており、この地域的な特色をもつものであろう。石室床面の敷石の性格は、須恵器敷床と同じように「追葬行為による」ものと考えられている⁽⁵⁾。なお、敷石の側面に接して出土した耳環（32）は、敷石設置時、すなわち、追葬時のものと考えられる。

石室入口付近の現状の封鎖石は、その周辺の遺物出土状況から追葬時に設置されたものと思われる。また、封鎖石の前面で須恵器杯蓋・杯身を重ねて置いた様子や壺を立てた様子がみられることから、この封鎖石が設置された時に、いわゆる墓前祭祀が行われた可能性がある。

(3) 出土遺物について

遺物は墳丘・石室・墓道から出土しているが、石室入口から墓道にかけて須恵器が多く出土した。この須恵器の杯蓋・杯身を中心に見てみると、杯蓋は口径11.8~15.3cm、器高4.1~5.0cmで

いずれも平坦な天井部から緩やかに湾曲し、口縁部はほぼ直立する。口径が13.2～15.3cmのもの（1～9、「杯蓋A類」とする）と11.8cmのもの（10、「杯蓋B類」とする）がある。杯身は口径10.1～13.0cm、高さ3.9～4.2cmで、たちあがりが11～13は直線的、14～19は反り気味である。なお、口径が11.6～13.0cmのもの（11～16、「杯身A類」とする）と10.1～10.5cmのもの（17・18、「杯身B類」とする）があり、杯蓋と同様に二分できそうである。この須恵器の時期について、向田裕始氏の編年では杯蓋A類・杯身A類がII段階第2段階（6世紀第4四半期頃）、杯蓋B類・杯身B類がII段階第3段階（7世紀前半頃）に該当するとみられる¹⁶。なお、追葬時のものと考えられる耳環（32）は、中空のもので、その出現は6世紀末～7世紀前半とされている¹⁷。このように、杯蓋A類・杯身A類は封鎖石設置以前にかき出された遺物、杯蓋B類・杯身B類は封鎖石設置時の遺物と考えられることや中空の耳環の出土状況から、古墳の造営は封鎖石設置以前のII段階第2段階（6世紀第4四半期頃）、追葬は敷石および封鎖石設置時のII段階第3段階（7世紀前半頃）と推定される。

最後に、石室入口付近中層から出土した鋸と思われる破片についてふれてみたい。鉄板の一端に短い柄をつけた形で、伊藤実氏の分類では、II-a類で「やや角度をもってつくりだされたもの」に該当するとみられる¹⁸。県内での鋸の出土例は、三次市福荷山D-2号古墳出土例¹⁹、安芸高田市植谷古墳出土例²⁰があり、本例が3例目である。本例の形状は福荷山D-2号古墳出土例に近く、時期的には植谷古墳出土例に近い時期である。なお、国内ではI類が4世紀ころから出現し、II類が6世紀ころから出土するようである。古墳から出土する鋸の性格については、一例として「6世紀の鋸を出土する古墳は、福岡県宗像地域の中小の円墳に集中」し、その地域に「須恵器生産と鉄生産に関連する遺跡が集中」することから、これらの生産活動に関係する可能性が指摘されている²¹。県内出土の3例はいずれも江の川流域に所在し、江の川流域には須恵器生産や鉄生産に関係する遺跡が他地域より多く点在することから、県内出土の3例の性格についても福岡県宗像地域と同じように生産活動に関係する可能性がある。本古墳が所在する江の川支流の西城川流域も鉄生産に関連する遺跡が点在することから、本古墳の被葬者も鉄生産に関連する可能性が考えられる。

以上、古墳の墳丘・石室・出土遺物についてみてきた。時期については、古墳の造営は6世紀第4四半期頃、追葬は7世紀前半頃と推定される。墳丘の石積・列石や石室床面の敷石は、江の川流域で比較的多くみられ、地域的な特色であろう。出土遺物では鋸が県内3例目で、いずれも江の川流域に所在している。このように遺構・遺物から、本古墳が江の川流域での地域色をいくつか備えていることが明らかとなった。被葬者の性格については、古墳の形状や規模からみると、後山町札場の地域の有力者と思われるが、前述のように鉄生産に関連する可能性も考えられる。

註

- (1) 列石・石積の分類は、A類（立体的に視覚にうつたえる形のもの。A類はさらにA-1類からA-4類に分かれる）の4タイプとB類（盛土中に含まれる隠蔽されるもの）と合わせて5タイプがあるとされている。
広島県比婆郡口和町教育委員会『池津第1号古墳発掘調査報告書』 1979年
- (2) 墳丘の列石や石積をもつ古墳は、三次市2例（本古墳含む）、庄原市5例、安芸高田市8例、北広島町2例、広島市4例、東広島市3例、福山市4例がある。
恵谷泰典「列石をもつ古墳－広島県内の調査例を中心に－」『研究相録』Ⅲ 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター 1993年
財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『拉原第2・3号古墳発掘調査報告書』 2001年
財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『植谷遺跡・根野見遺跡・植谷古墳発掘調査報告書』 2002年
- (3) 註(1)の文献と同じ。
- (4) 県内の須恵器軒床で平石敷の横穴式石室墳8例は、安芸高田市（高宮町）5例、三次市（三良坂町）2例、東広島市（西条町）1例である。
藤坂光彦「三次地域の横穴式石室墳」『芸備』第33集 芸備友の会 2006年
- (5) 註(4)の文献と同じ。
- (6) 向田裕始「芸備地方における須恵器生産(1)－古墳時代を中心として－」『芸備古墳文化論考』 芸備友の会 1985年
- (7) 松本百合子「2副葬品の種類と縦年 5装身具 B耳飾」『古墳時代の研究』第8巻 雄山閣出版株式会社 1991年
- (8) Ⅲ-2-2章の註(2)の文献によると、「短冊形のもの（I類）と茎をつくり出すもの（II類）」があり、II類の中で鋸身の片側に「短い茎をもつもの」（II-a類）、鋸身の片側に「長い茎をもつもの」（II-b類）、「鋸身の両端を曲げさせて茎としたもの」（II-c類）に分類されている。
- (9) 鋸の形状はII-a類に分類され、古墳の時期は5世紀末から6世紀初頭とされている。
広島県双三郡三良坂町教育委員会『福荷山D-2号古墳－土地改良総合整備事業に伴う発掘調査－』 1983年
- (10) 鋸の形状はI類に分類され、古墳の時期は6世紀末から7世紀初頭とされている。
財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『植谷遺跡・根野見遺跡・植谷古墳発掘調査報告書』 2002年
- (11) Ⅲ-2-2章の註(2)の文献と同じ。
- (12) 須恵器生産については、註(6)による。鉄生産については、次の文献による。
山田繁樹「原始・古代編 IV 古墳時代 《特論一》三次盆地の古墳時代の住居と集落」『三次市史』 I 三次市 2004年

IV 大 平 遺 跡

IV-1 調査の概要

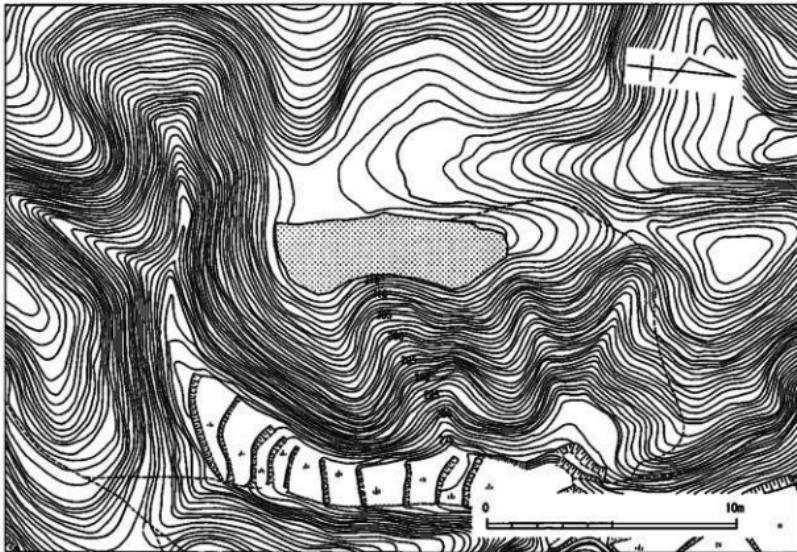
(1) 遺跡の状況 (第IV-1図、図版12-a~c)

大平遺跡は、三次市東北部の江の川水系西城川左岸から約2km南に入った地点に位置する。遺跡は南北に延びる丘陵尾根筋上に立地し、最高所の標高は約319mで東側の水田面からの比高は約47mである。

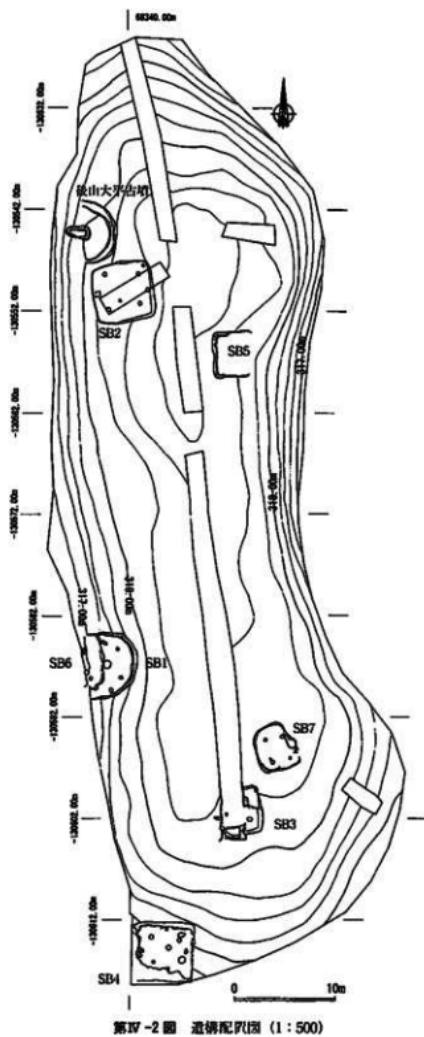
現状は山林で、調査区の東側斜面は榆の植林で、また西側にかけては雜木が植生していたことから調査開始時には数多くの切り株が残存していた。遺跡の立地する丘陵の東側と南側の斜面は急激に傾斜して下がっているのに対して、西側は小さな谷が湾入し、さらに西側の山塊に続く地形を呈していた。

(2) 調査の方法・概要 (第IV-2図)

試掘では、現表面から約30cm下で遺構面を確認していることから、遺構確認面までは重機を使用して掘り下げるのこととした。ただし前述のように切り株が多く、単純に抜根すると遺構を損壊することが考えられたため、切り株は極力残して掘り下げることとした。このため重機を使用しての掘り下げは面積的に限定され、その後の遺構の精査には時間を要した。



第IV-1図 周辺地形図 (1:2,000) *アミ目:調査地



調査の結果、主に尾根筋から西側の斜面にかけて竪穴住居跡5軒（SB1・2・4・6・7）と竪穴住居状造構2基（SB3・5）、箱式石棺を埋葬施設とする古墳1基を確認した。

5軒の竪穴住居跡には円形住居跡1軒と3軒の方形住居跡、不整形な住居跡1軒があった。また、5軒のうち2軒は柱材などの炭化材が出土したことから、焼失家屋と考えられた。これらの住居跡5軒と住居状造構2基は出土した遺物から弥生時代後期後半から奈良・平安期（8～9世紀）頃にかけてのものであることを確認し、山間地域における村落として断続的に存続してきたことが明らかとなった。

なお、古墳は「後山大平古墳」として別項で報告する。

IV-2 遺構と遺物

(1) 検出の遺構

SB1 (第IV-3図、図版13-a~c)

調査区中央からやや南側によつた西側斜面で検出した、直径が6.5m程度の円形と考えられる竪穴住居跡で、住居跡の西半分が後世のSB6によって掘削されており、全体規模は明らかでない。

壁は残りの良い東壁では高さが65cmあり、床面から約40°~60°の角度で立ち上がつてゐる。壁際には幅15~20cm、深さ1~4cm、断面「U」字状の浅い壁溝が廻つており、SB6との境付近で途切れてゐる。床面はやや南側に傾斜してゐる。

壁際から床面にかけて住居の屋根材と考えられる炭化材や焼土が残存しておる、本住居跡が焼失家屋であると考えられる。特に検出した炭化材は住居中央から壁際に向けて放射状に分布しており、垂木などの屋根材であったと考えられる。また、焼土の一部は炭化材を覆うように出土したことから、屋根材の上に土が塗られていたと思われる。

覆土は焼失時の崩落土である暗黄褐色系のものが堆積した後、暗褐色系の土が、東側の斜面上方から流入してゐた。

SB1の床面からは、ピット5個(P1~5)を検出した。このうちP3とP4は壁約1m内側にあり、また径が20~30cm、深さ約50cmと同規模であることから、本住居の主柱穴と考えられる。これに対しP1・2は深さが20cm前後と浅く、またP5は径約35cm、深さ約10cmで壁溝から約30cmと近距離にあることから主柱穴とは考えられない。

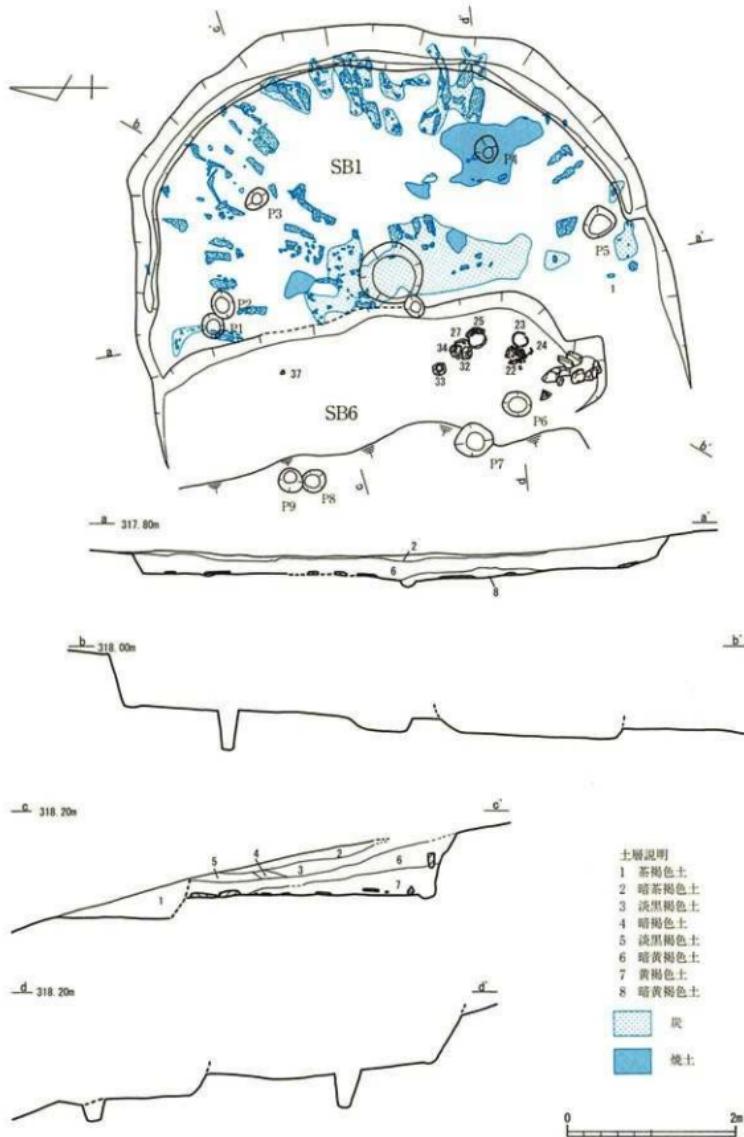
また、SB6の床面で検出したP6・8は径が30~35cm、深さ約20cmで、P3・4に対応する位置にあり、深さについてはSB6によって削平されていることを考慮すれば、SB1の床面からは約60cmであることから、SB1に伴うものと考えられ、本来この住居が4本柱の住居構造であったと思われる。さらに床面中央には径75cm、深さ15cmのすり鉢状の円形の穴があり、炉跡と考えられる。

SB1からは口縁部に浅い凹線を有する弥生時代後期後半頃の土器(1~5)や上部の覆土中から土師器(6)、須恵器(7)などが出土している。

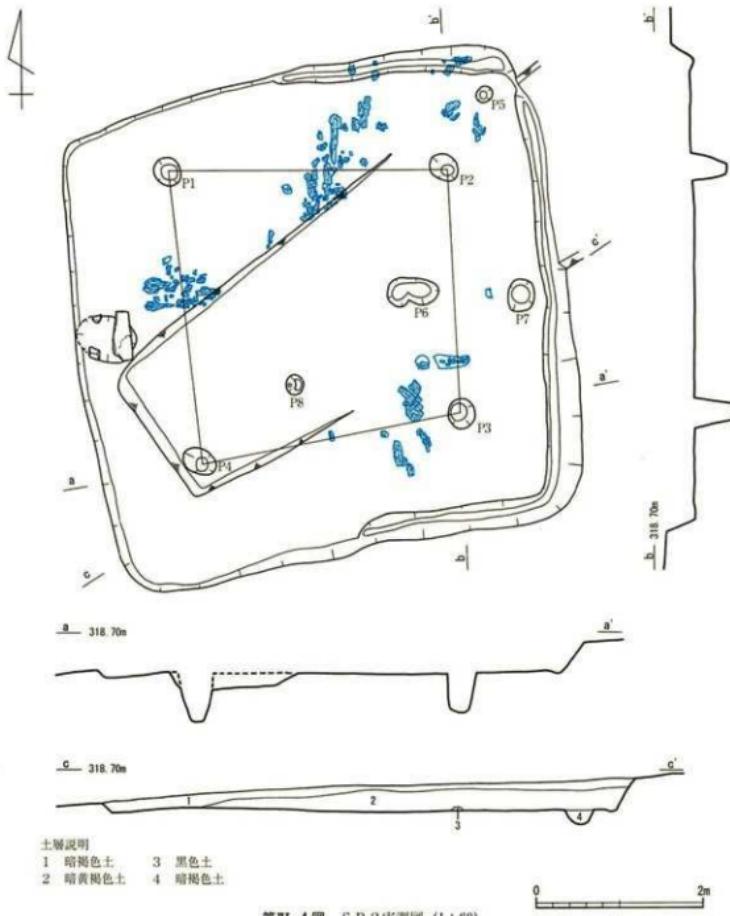
SB2 (第IV-4図、図版14-a~c)

調査区北半部の尾根筋上に位置する方形の竪穴住居跡で、住居跡の北西隅が古墳と近接した位置にある。この住居跡は試掘時に確認されたもので、住居跡の北東隅から南北方向に試掘坑を入れられていた。

住居の規模は一辺が5.7~5.8mで、高さは最も残存状況の良好な南東隅で22cmである。また壁は床面から50°~65°の角度で立ち上がつてゐる。床面の南辺の中央から東辺及び北辺の中央にかけて幅15~20cm、深さ約5cm、断面「U」字状の浅い壁溝が廻つてゐる。



第IV-3図 SB1・6実測図 (1:60) *数字は遺物番号

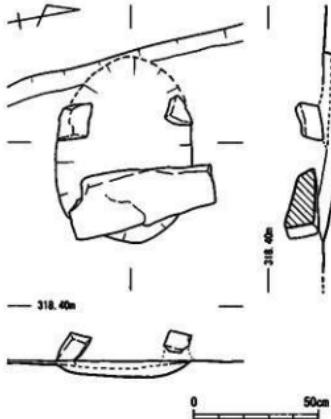


第IV-4図 SB 2実測図 (1:60)

床面はほぼ水平で、住居跡の西部・北部・南東部を中心に床面にほぼ密着した状況で炭化材が出土した。このことから焼失家屋であったと考えられる。

覆土は焼失家屋であるため暗褐色系のもので、東西方向にはほぼ水平堆積していた。

また床面からは8個のピット(P1~8)を検出したが、このうちP1~4が径約30cm、深さ40~50cmと同規模であり、壁際や周溝から0.7~1.0mとほぼ等距離にあることから、主柱穴と考えられ、本住居が4本柱の住居構造であったと考えられる。なお、P5~8の大きさは、P5が径18~22cm、深さ20cm、P6が長軸60cm、短軸35cm、深さ14cm、P7が径30~40cm、



第IV-5図 SB 2 カマド実測図 (1:20)

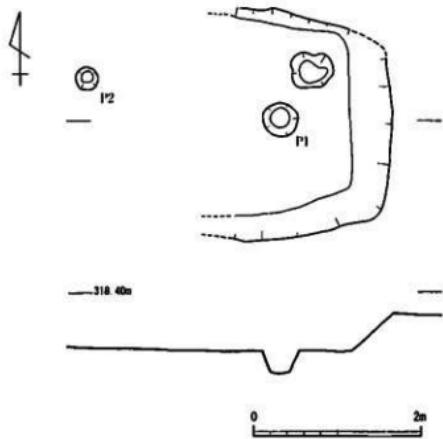
深さ 18cm、P 8 が径 22 ~ 25cm、深さ 13cm である。一方、西辺の中央付近には長径 74cm、短径 55cm、深さ 10cm ほどの梢円形をした掘り込みがあり、壁面に平行して熱変した長細い石と掘り込みの両側に立った状況で小石を 1 個ずつ検出した。このことからこの部分が造り付けのカマドであったと考えられ、小石を袖石とし細長い石をこの上に架構していたものと思われるが、現状では細長い石は袖石の手前で検出した。また住居跡の外側にかけてはカマドの煙道部は確認できず、斜面下方側にあたることから流失したものと考えられる。

SB 2 からは土師器・甕 (8) 及び須恵器・高杯脚部 (9) が出土し、その特徴から 6 世紀後半頃のものと考えられる。

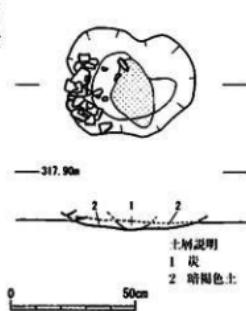
SB 3 (第IV-5・6図、図版 15-a~c)

調査区南半部の尾根筋中央に位置する方形と思われる竪穴住居状の遺構で、試掘坑内に完全にはまり込んでいることから全体の規模は明らかではないが、東辺で 2.2m を測る。なお北東側には、SB7 が近接している。

住居跡の壁は東辺で高さ約 40cm、床面からは約 40° の角度で立ち上がる。床面はほぼ水平で、



第IV-6図 SB 3 実測図 (1:60)



第IV-7図 SB 3 内土坑実測図
(1:20) 東アミ目: 磁

東壁から内側に 60cm 入った箇所で径 40cm、深さ 25cm の円形のピット (P 1) を検出したが、このほかに柱穴らしきものではなく、住居構造については明らかではない。なお、P 2 の大きさは、径 23 ~ 26cm、深さ 23cm、である。

また、住居の大半が試掘時に掘削されているため、住居跡の覆土についても明らかでない。

P 1 の北東隅に近接して土師器などを伴った長軸 50 センチ、短軸 35cm、深さ 2 ~ 5cm の不整形な土坑を検出した。炭が多く含まれていたが、焼土は確認できなかった。検出状況から S B 3 より新しい時期の可能性もある。

SB 3 では、この不整形な土坑の掘方上面にはほぼ密着した状況で土師器 (10 ~ 13) をはじめ、焼成の不十分な須恵器片があり、6 世紀代のものと考えられる。

SB 4 (第IV-7図、図版 16-a ~ c)

調査区南端で検出した方形の竪穴住居跡である。住居跡の南半部の斜面が急激に傾斜していることから、住居の南壁及び床面の南寄りはすでに流失していた。

住居の壁は最も残りの良好な北壁で長さ 5.7m、高さ約 70cm。床面からは約 55° の角度で立ち上がっていた。北壁と西壁の壁際に沿って幅 10 ~ 20cm、深さ 1 ~ 4cm、断面「U」字状の浅い壁溝が途切れた状態で掘り込まれていた。西壁中央の不整形の穴は後世の掘り込みである。

床面はほぼ水平で、覆土は暗褐色土及び暗茶褐色土が東西方向では水平に堆積していた。床面からは径 30 ~ 40cm、深さ 45 ~ 55cm の 4 個の主柱穴 (P 1 ~ 4) を検出し、4 本柱の構造を有する住居であることが明らかとなった。P 5 ~ 8 の大きさは、P 5 が長軸 70cm、短軸 45cm、深さ 34cm、P 6 が長軸 40cm、短軸 25cm、深さ 21cm、P 7 が径 30 ~ 60cm、深さ 35cm、P 8 が径 20 ~ 22cm、深さ 29cm である。なお、床面の中央からやや東側に寄った付近で検出した径約 45cm、深さ約 10cm の浅い円形の穴は、覆土に若干の炭化物を含んでいた。また、住居の北東隅から 1mほど南側に寄った東壁で造り付けのカマドを検出した。このカマドは焚口付近の幅が 40cm で、この付近に高さ 15cm ほどの石を焚口の両側に立てて袖石としたものであるが、この袖石には粘土などを巻いた痕跡はない。さらに、両袖石の間の底面は長径 40cm、短径 25cm ほど赤く変色していた。

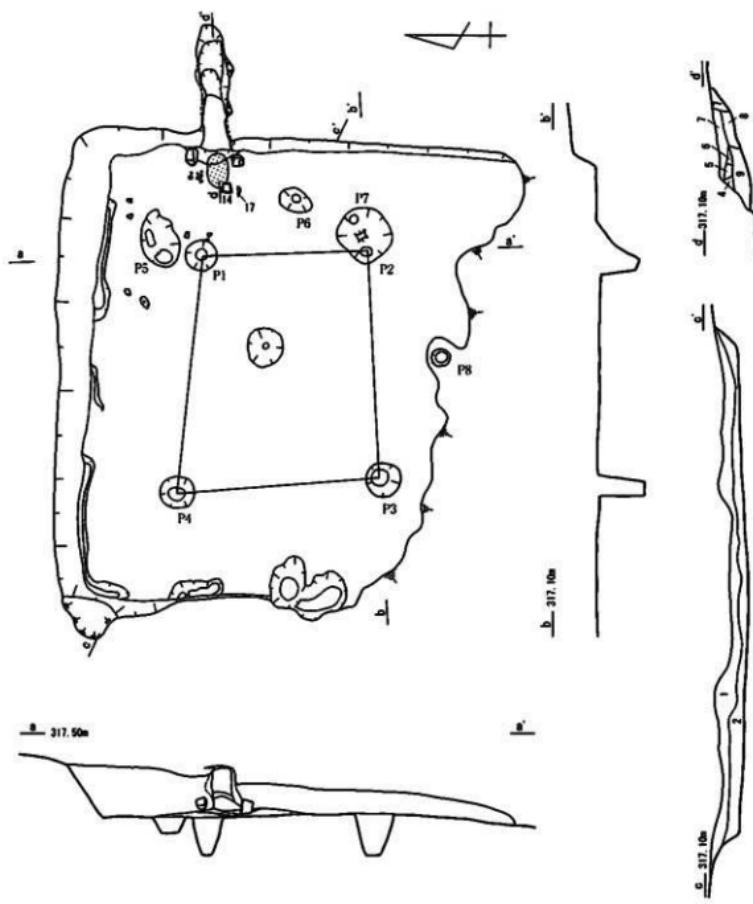
煙道部は焚口から住居の外側に 1.65m 延びており、底面は床面から約 15° の角度で立ち上がっていた。煙道部の幅は約 30cm で、横断面はやや中央部が張る状況にある。また煙道部には暗褐色系の土（土層番号 4・8・9）が堆積していた。

出土遺物には土師器や須恵器（甕・高杯・杯蓋）などがあり、14・17 は床面の中央付近からカマド付近にかけて、15・16 は覆土から出土した。

本住居跡については、須恵器の杯蓋 (17) の特徴から 6 世紀後半頃のものと考えられる。

SB 5 (第IV-8図、図版 17-a ~ c)

調査区北半部の尾根筋上で検出した方形の竪穴住居状の遺構で、SB 2 からは南東隅に約 7m



土種説明

- | | |
|---------|---------|
| 1 暗褐色土 | 6 茶褐色土 |
| 2 暗茶褐色土 | 7 暗黃褐色土 |
| 3 淡茶褐色土 | 8 暗黃褐色土 |
| 4 茶褐色土 | 9 暗茶褐色土 |
| 5 黃褐色土 | |

0 2m

第IV-8図 SB 4実測図(1:60)※アミ目:赤色面、14・17は遺物番号

離れた場所に位置する。壁は東壁を除いた3方向の壁が残存しており、最も残りの良好な西壁は長さ4.5m、高さ32cmで、床面からは約55°の角度で立ち上がっており、丘陵斜面下方側の東壁は、後世の削平などにより消失していた。覆土は暗褐色土及び暗黄褐色土である。

北壁の一部から西壁及び南壁の一部にかけての壁際には、幅20~25cm、深さ2~9cm、断面「U」字状の浅い壁溝が廻っていた。床面はほぼ水平であるが、柱穴らしき落ち込みは確認されなかったことから、住居の構造については明らかではなく、一般的な居住空間であったかは明確でない。

遺物は瓶の把手(20・21)などの土師器が床面の中央付近から出土したほか、土師器(18・19)や焼成の不十分な甕と思われる須恵器片が覆土中から出土し、その特徴から6世紀後半頃のものと考えられる。

SB 6 (第IV-3図、図版13-a~c)

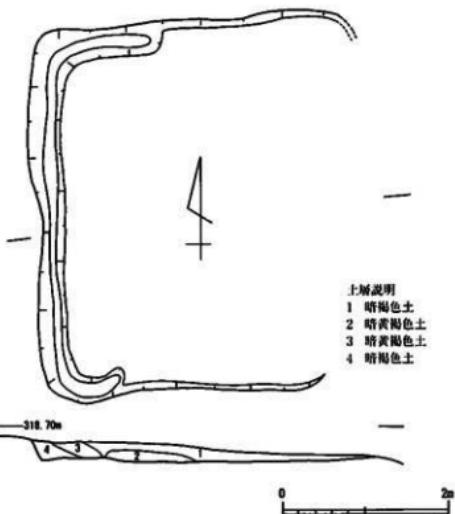
SB 1の西側を掘り込んで造られた方形の竪穴住居跡で、住居の大半は後世の搅乱等で消失し、東壁が残存するだけである。東壁の規模は長さ4.7m、高さ19~33cmで、床面から約50°の角度で立ち上がっていた。残存する床面はほぼ水平で、覆土は茶褐色土である。

床面からは4個のピット(P 6~9)を検出するが、SB 1で記したようにP 6とP 8はSB 1に伴うと考えられ、P 7は径約45cm、深さ約30cm、P 9は径約30cm、深さ約35cmで、その位置や深さなどからSB 6の主柱穴になるとと考えられる。

南東部の壁際からは比較的集中して土師器の甕(22~26)や須恵器の杯身・杯蓋(27~36)などが出土しており、高台付須恵器の杯身の特徴から8~9世紀頃のものと考えられる。なお、北東部の覆土から砾石(37)が出土した。

SB 7 (第IV-9図、図版18-a~c)

SB 3の北東側に位置する竪穴住居跡で、やや不整形な隅丸方形を呈する。壁の規模は長さ3.3~3.6m、高さ10~20cmで、床面から60°~70°の角度で立ち上がっていた。



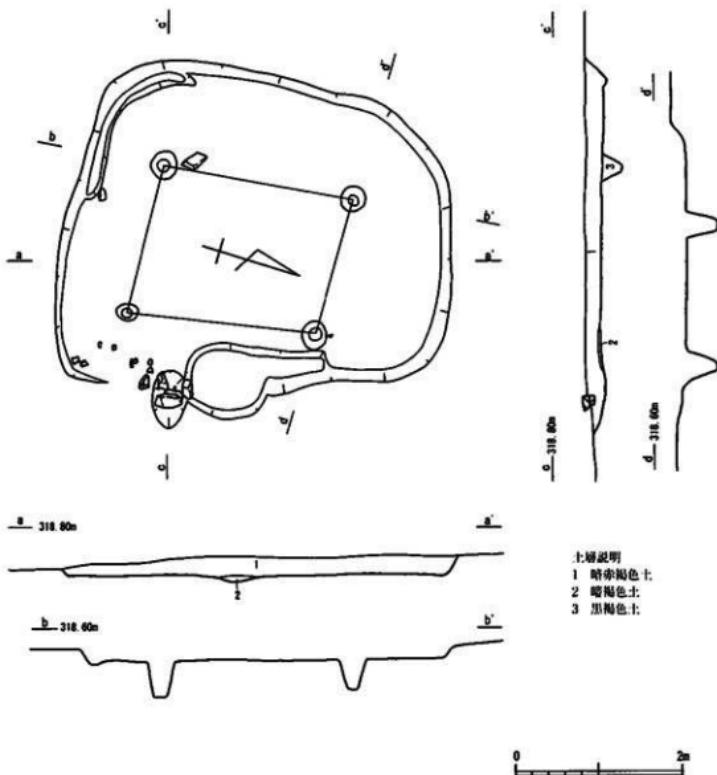
第IV-9図 SB 5実測図 (1:60)

床面の南西隅の一部に壁溝が見られるが、ほかの部分では検出されなかった。床面はほぼ水平で、覆土は褐色系の土である。

床面からは径 20 ~ 30cm、深さ 40 ~ 45cm の 4 個のピットを検出したことから、4 本柱構造の住居であったと考えられる。

また、住居の東壁のやや南側に寄った付近で造り付けのカマドを検出した。このカマドは焚口部の両袖に石を 1 個ずつ立て、これらの石に横長の石を架構するものである。なお、煙出しは削平され明確でなかった。

覆土から土師器片や須恵器片（38 ~ 41）が出土しており、須恵器（38）の特徴から 6 世紀後半頃のものと考えられる。



第IV-10図 SB 7 灰窓4 (1:60)

(2) 出土遺物

各遺構から弥生土器・土師器・須恵器などの土器類、石器類が出土したが、ここでは遺構にその概略を記述する。

SB 1 (第IV-12図、図版21)

1～5は弥生土器、6は土師器、7は須恵器である。1・2は壺と思われるもので、1の口縁部は頸部から外反したのち、屈曲して外上方にのびておわる。口縁部外面には3条の凹線が廻る。2の口縁部は頸部から緩やかに外反し、屈曲して短く上方にのびておわる。口縁部外面には2条の凹線が廻る。3・4は壺の口縁部で、3は強く屈曲した頸部から外上方にのび、端部は上下方向にわずかに拡張しておわる。口縁部外面には3条の凹線を廻らす。4は強く屈曲した頸部から直線的に外上方にのび、端部は上下方向に拡張しておわる。口縁部外面に4条の凹線を廻らす。5は器種が不明で、端部は丸くおわる。外面に凹線が廻る。

6は壺の口縁部で、緩やかにカーブした頸部から外上方にのび、端部は丸くおわる。7は壺の胴部で外面に縦方向の平行タタキ目の後、横方向のカキ目を施す。

SB 2 (第IV-12図、図版21)

8が土師器の壺、9が須恵器の脚部である。8は球形をした胴部で、口縁部は屈曲した頸部から外反し、端部は丸くおわる。9は低脚の脚部で、裾部にかけてラッパ状に開く。

SB 3 (第IV-12図、図版21)

10～13は土坑から出土した土師器である。10は壺で、球形をした胴部で、口縁部は緩やかにカーブした頸部から外反し、端部は丸くおわる。11～13は瓶で、11・12の口縁部は体部からわずかに外反しておわる。13は牛角状の把手である。

SB 4 (第IV-13図、図版21・22)

14～17はいずれも須恵器である。14は壺の胴部で内面に同心円文のタタキ目を残す。15は壺の口縁部で、頸部から緩やかに外反して短く外上方にのび、端部は矩形を呈する。16は低脚の脚部で、裾部にかけて緩やかにラッパ状に開き、端部は上方に拡張する。脚柱部には2か所に三角形の透かしを入れる。17は杯蓋で丸い天井部から口縁部上半にかけてカーブし、口縁部下半はやや内側に湾曲する。端部は丸くおわる。

SB 5 (第IV-13図、図版22)

18～21はいずれも土師器である。18・19の器種は不明であるが、口縁部は頸部からわずかに外反しておわる。20・21は瓶の牛角状の把手である。

SB 6 (第IV-13・14図、図版22・23)

22～26は土師器、27～36は須恵器、37は砥石である。土師器はいずれも壺である。22は平底気味の底部から緩やかに内湾して胴部が立ち上がる。胴部の最大径は下半部にある。口縁部は頸部から外反し、端部は丸くおわる。23は胴部最大径付近から緩やかに内湾して立ち上がり、口縁部は頸部から外反し、やや尖り気味におわる。24はやや長胴形で、胴部最大径付近から緩やかに内湾して立ち上がり、口縁部は頸部から外反し、やや尖り気味におわる。25は胴部最大径付近から緩やかに内湾して立ち上がり、口縁部は頸部から強く外反し、端部は丸くおわる。26は緩やかにカーブする胴部から頸部に至り、口縁部は頸部から強く外反し、端部は矩形を呈する。27～29は杯蓋で、27の天井部は平坦で、直線的に外方に開き、口縁端部は垂下しておわる。扁平な宝珠状のつまみが付く28・29は丸い天井部で、口縁部は28がやや垂下し、また29は開き気味にのび、どちらも端部は丸くおわる。

30～36は杯身で、33～36は高台が付くものである。30・31は小型のもので、平底の底部から緩やかに内湾して体部が立ち上がり、口縁端部は丸くおわる。32はやや大型のもので、平底の底部からやや直線的に体部が外上方に立ち上がり、端部はやや尖り気味となる。33～36は平底の底部からやや直線的に体部が外上方にのび、口縁端部は丸くおわる。底部にはやや外開きの高台が付き、断面は矩形を呈する。

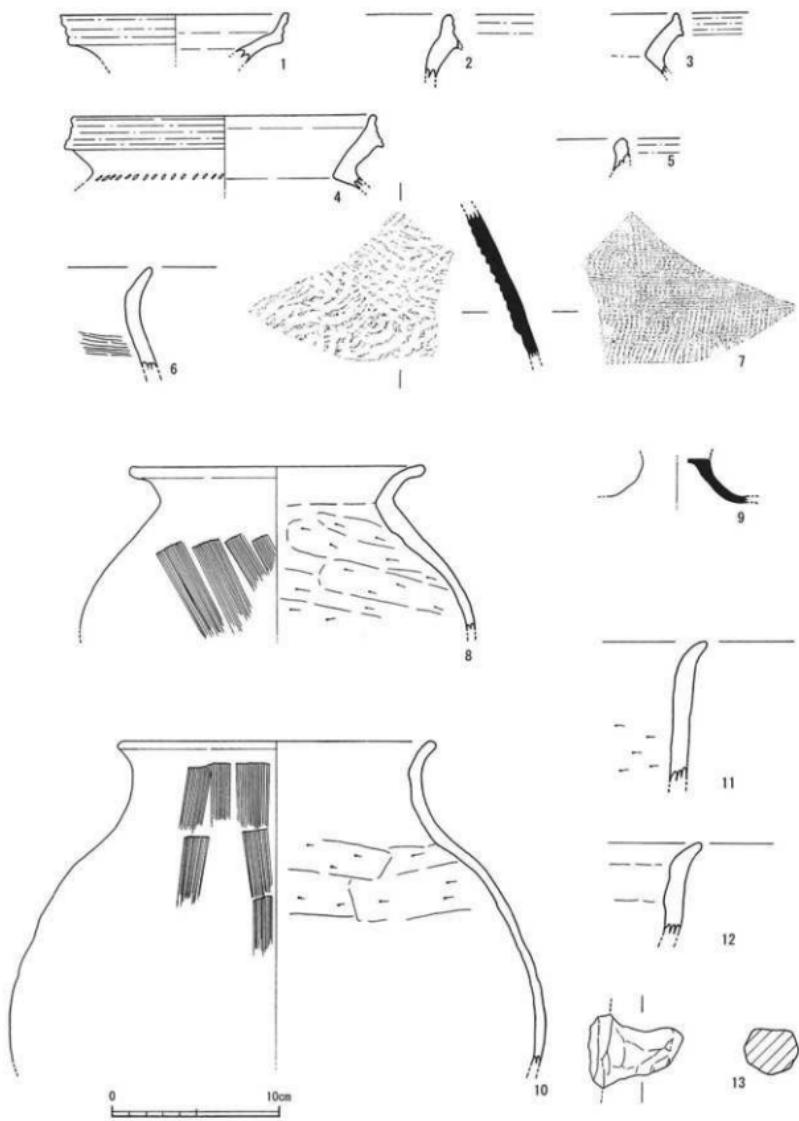
37は中央部で折れ、使用面がバチ形となった砥石である。側面は4面とも著しく使用されており、擦痕が顯著である。重さは77.13gである。

SB 7 (第IV-15図、図版23)

38～41はいずれも須恵器である。38は杯蓋で緩やかにカーブした天井部から口縁部にいたる。口縁端部は丸くおわる。39は杯身で、平底の底部から体部が緩やかにカーブして立ち上がる。40・41は壺の胴部で、40の外面には格子のタタキ目、41の外面には平行のタタキ目が残る。また、内面はいずれも同心円文のタタキ目である。

調査区出土 (第IV-15図、図版23・24)

42・43は土師器で、44～50は須恵器である。42は壺と思われるもので、口縁部は頸部から緩やかに外反して外上方にのび、端部は丸くおわる。43は瓶の牛角状の把手である。44～47は杯身で、44は平底気味の底部から緩やかに体部がカーブして立ち上がり、口縁部の受部は内湾して短くのびておわり、たちあがり部は外反して短くのびておわる。45の口縁部は受部が内湾して短くのびておわり、また、たちあがり部は直線的に短く内傾しておわる。46は平底の底部から体部が緩やかにカーブして立ち上がる。47は平底の底部にやや外開きした高台が付くもので、高台は端部がやや内外に拡張するものである。48～50は高杯で、48は杯部の底部である。体部は底部から緩やかに立ち上がっている。49・50は脚部で、据部にかけて緩やかに広がった後、端部は上下方向にやや拡張している。



第IV-11図 出土遺物実測図 (1 : 3)



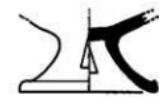
1



14



15



16



17



18



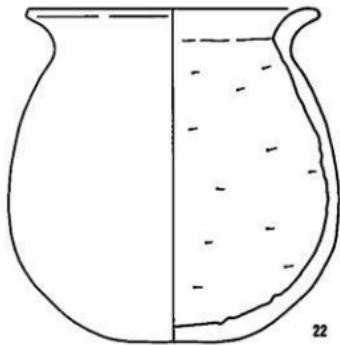
19



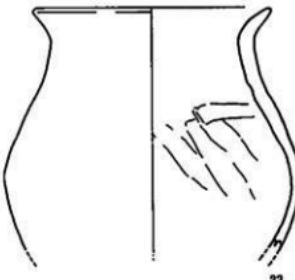
20



21



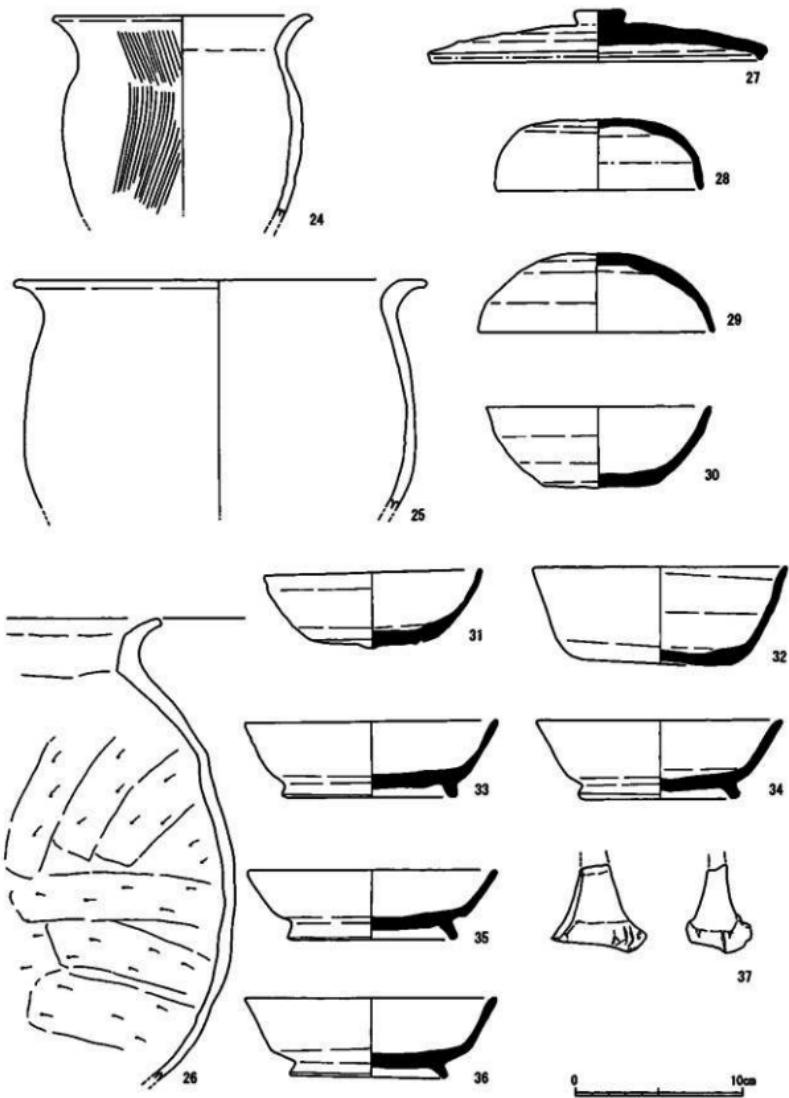
22



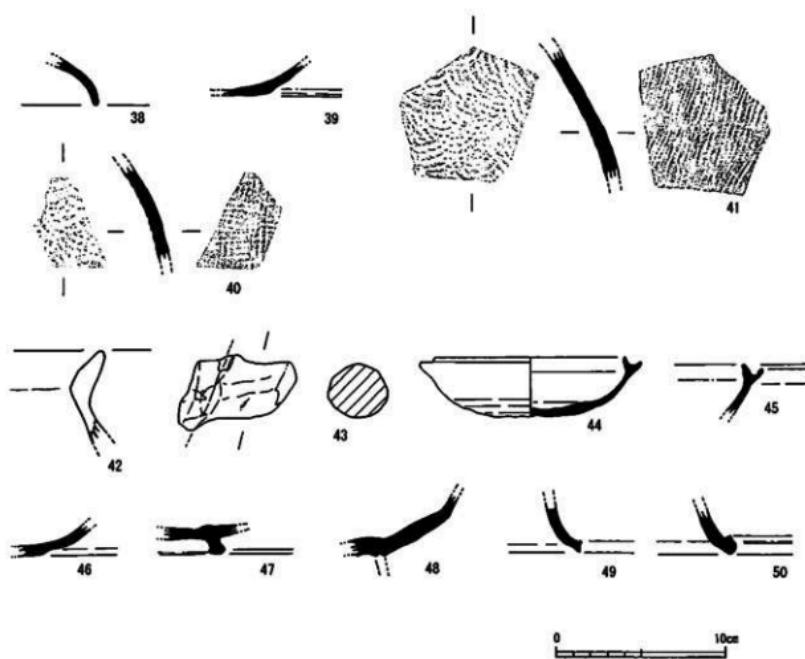
23



第IV-12圖 出土遺物實測圖(2) (1:3)



第IV-13図 出土遺物実測図(3)(1:3)



第IV-14図 出土遺物実測図(4)(1:3)

表 出土遺物観察表

(1:3) 検定値

遺物番号	組合番 号	種 別	器 形	大きさ(cm)			調 查	色調(外觀)	胎 土	備 考
				口 径	高 度	最 大 厚				
BB1	1	弥生土器	甌?	(13.7)			外底:不明 内底:不明	灰褐色	砂粒多含	口縁部外周3角の凹線
	2	弥生土器	甌?				外底:ヨコナギ 内底:ヨコナギ	灰褐色	細砂粒多含	口縁部外周3角の凹線
	3	弥生土器	甌				外底:不明 内底:不明	灰褐色	細砂粒多含	口縁部外周3角の凹線
	4	弥生土器	甌	(18.4)			外底:ヨコナギ 内底:ヨコナギ	灰褐色	細砂粒多含	口縁部外周4角の凹線
	5	弥生土器	不明				外底:ヨコナギ	灰褐色		
	6	土器器	甌				外底:ヨコナギ、不明 内底:ヨコナギ、ハケ	灰褐色	細砂粒多含	
	7	土器器	甌				外底:平行マサキ目、カネ目 内底:ハゲ目	灰褐色	砂粒含まず	
BB2	8	土器器	甌	(17.5)			外底:ヨコナギ、ナギ、ハケ 内底:ヨコナギ、ナギ	灰褐色	砂粒多含	
	9	土器器	圓盤				外底:ヨコナギ 内底:ヨコナギ	灰褐色	細砂粒多含	
	10	土器器	甌	(18.4)			外底:不明、ハケ、不明 内底:不明、ナギ、ナギ	灰褐色	砂粒多含	
BB3 内底	11	土器器	甌				外底:ヨコナギ、ナギ	灰褐色	砂粒含	
	12	土器器	甌				外底:ヨコナギ、ナギ、ナギ 内底:ヨコナギ、ナギ、ナギ	灰褐色	砂粒含	
	13	土器器	甌 (底下)				外底:削痕による凹溝 内底:ナギ	灰褐色	砂粒含	

表 出土遺物観察表

遺物番号	組合番号	種別	器種	大きさ(cm)			調査	色調(外因)	胎土	備考
				口径	高さ	最大幅				
SB4	14	須恵器	甕				外因:不明 内因:同心円テラケツリ	灰褐色	砂粒多含	
	15	須恵器	甕				外因:ロクロナデ	灰褐色	細砂粒多含	内外面に自然鉛施有
	16	須恵器	瓶	脚付 (H.2)			外因:ロクロナデ、ナデ 内因:ロクロナデ、ナデ	灰褐色	砂粒少度含	三内通2か所
	17	須恵器	杯	12.6	4.4		外因:回転ヘラケツリ、ロクロナデ 内因:ロクロナデ	灰褐色	砂粒多含	
SB5	18	土師器	不明				外因:不明 内因:不明	灰黃褐色	細砂粒多含	瓶口縁部?
	19	土師器	不明				外因:不明 内因:不明	灰褐色	砂粒多含	瓶口縁部?
	20	土師器	瓶	(把手)			外因:不明 内因:不明	灰黃褐色	砂粒多含	
	21	土師器	瓶	(把手)			外因:不明 内因:不明	くすんだ灰褐色	砂粒多含	
SB6	22	土師器	甕	(17.2)	(19.9)	(19.5)	外因:ミコナデ、ハケリ版ナデ? 内因:ミコナデ、ケメリ	深褐色	細砂粒含	
	23	土師器	甕	(14.1)		(17.1)	外因:ミコナデ、不明 内因:ミコナデ、ナデ	くすんだ灰褐色	細砂粒多含	
	24	土師器	甕	(15.0)		14.2	外因:ミコナデ、ナデ 内因:不明	暗褐色~ 灰褐色	砂粒多含	
	25	土師器	甕	(26.5)		(25.2)	外因:ミコナデ 内因:不明	灰褐色	細砂粒多含	
	26	土師器	甕				外因:ミコナデ、ナデ 内因:ミコナデ、ナデ	灰黃褐色	砂粒多含	
	27	須恵器	杯形	19.6	3.1		外因:ロクロナデ	灰灰褐色	細砂粒含	定珠柄み付き
	28	須恵器	杯形	12.2	4.1		外因:ロクロナデ、一面ナデ 内因:回転ヘラケツリ、ロクロナデ	灰褐色	細砂粒多含	一次焼成段階?
	29	須恵器	杯形	14.0	4.7		外因:回転ヘラケツリ、ロクロナデ 内因:ロクロナデ	灰灰褐色	細砂粒多含	
	30	須恵器	杯身	13.5	4.8		外因:ロクロナデ 内因:ロクロナデ	灰灰褐色	細砂粒少含	底盤:回転ヘタ切り
	31	須恵器	杯身	12.8	4.7		外因:ロクロナデ 内因:ロクロナデ	灰褐色	細砂粒多含	底盤:回転ヘタ切り
SB7	32	須恵器	杯身	15.2	5.8		外因:不明 内因:ロクロナデ?	灰黃褐色	細砂粒含	生焼け? 一次焼成段階?
	33	須恵器	杯身	15.2	4.5		外因:回転ヘタ切り、ロクロナデ 内因:ロクロナデ	灰灰褐色	細砂粒多含	
	34	須恵器	杯身	14.7	4.7		外因:不明、ロクロナデ? 内因:不明、ロクロナデ?	灰黃褐色	細砂粒含	高台付 生焼け? 一次焼成段階?
	35	須恵器	杯身	14.9	4.2		外因:回転ヘタ切り、ロクロナデ 内因:ロクロナデ	灰黃褐色	細砂粒多含	
	36	須恵器	杯身	15.1	4.8		外因:不明、ロクロナデ? 内因:不明、ロクロナデ?	灰褐色	細砂粒少含	高台付 生焼け? 一次焼成段階?
	37	石器	研石					灰褐色		侧面4面を使用、平欠
	38	須恵器	杯形				外因:ロクロナデ 内因:ロクロナデ	灰灰褐色	細砂粒含	
	39	須恵器	杯身				外因:ロクロナデ 内因:ナデ	灰褐色	細砂粒多含	底盤凹陥ヘタ切り裏ナデ
	40	須恵器	甕				外因:ロクロナデ 内因:同心円テラケツリ	灰褐色	細砂粒含	
	41	須恵器	甕				外因:平行タガ奈目、カセ目 内因:同心円テラケツリ	灰褐色	細砂粒少含	
諸塚区	42	土師器	甕				外因:不明 内因:不明	灰褐色	細砂粒多含	
	43	土師器	瓶 (把手)				外因:沿縁に上る調査 内因:ケメリ	灰褐色	砂粒多含	
	44	須恵器	杯身	(11.2)	(3.5)		外因:ロクロナデ 内因:ロクロナデ、回転ヘラケツリ	灰褐色	砂粒多含	袋輪はオリヨミ手筋
	45	須恵器	杯身				外因:ロクロナデ 内因:ロクロナデ	灰褐色	細砂粒含	袋輪はオリヨミ手筋
	46	須恵器	杯身				外因:ロクロナデ 内因:ロクロナデ	灰褐色	細砂粒多含	
	47	須恵器	杯身				外因:ロクロナデ? 内因:ロクロナデ?	灰褐色	細砂粒含	高台付
	48	須恵器	高杯				外因:ロクロナデ 内因:ロクロナデ、回転ヘラケツリ	灰褐色	細砂粒多含	杯筋
	49	須恵器	高杯				外因:ロクロナデ 内因:ロクロナデ	灰褐色	細砂粒多含	圓底盤
	50	須恵器	高杯				外因:ロクロナデ 内因:ロクロナデ	灰褐色	砂粒を含まず 無縫	圓底盤

IV-3 まとめ

今回の調査においては、弥生時代後期後半頃から8～9世紀にかけて断続的に営まれた集落跡を検出した。ここでは、集落跡と出土遺物についてまとめとする。

(1) 集落跡について

今回調査を実施した大平遺跡では5軒の竪穴住居跡（SB 1・2・4・6・7）と2基の竪穴住居状遺構（SB 3・5）を検出した。これらの住居跡はそれぞれ出土した遺物の特徴から弥生時代後期後半頃の竪穴住居跡（SB 1）、6世紀後半頃の竪穴住居跡・竪穴住居状遺構（SB 2・4・5・7）、8～9世紀頃の竪穴住居跡（SB 6）と考えられる。

のことから、本遺跡において集落としての使用開始期が弥生時代後期後半頃で、集落として規模が最大となった時期が古墳時代後半で、その終焉が8～9世紀頃であったことがわかる。

しかし各時代において集落規模としては小規模であったことは明らかであり、このことは遺跡の立地に起因すると考えられる。つまり集落が山間地域の標高の高い場所に立地し、しかも周辺部には、生活の基盤の可耕地が小規模であったと思われることから、この集落に生活できる人員が限定的とならざるを得なかつたのであろう。

一方、三次市街地周辺の弥生時代から古墳時代の集落遺跡の状況を見た場合、松ヶ迫遺跡群^[1]のような大規模な遺跡もみられる。このことはその生産基盤の規模の違いから生じることは明らかであり、当然集落規模に格差が生じたのであろう。しかし大平遺跡のように矮小な生産基盤しかもてないような場所に生活の場を求めなければならなかつたという事実は、当時の社会構造の一面をのぞかせている可能性も考えられる。

なお、SB 3については規模が小さいことや、柱穴がないことなど住居構造が不明確なことから、一般的な住居か定かでない。本遺跡から出土した須恵器の中には、焼成の不十分なものが多く見られることから、須恵器生産に関する工房的な施設があったことも考えられ、SB 3がそのような施設であった可能性も考えられよう。

また、古墳時代における本遺跡の性格についても、上述のように須恵器生産に関わるものであった可能性も考えられ、小規模集落の成立を考える上でひとつの示唆を与えるものと考えられよう。

(2) 出土遺物について

今回出土した遺物としては、少量の弥生土器と土師器・須恵器がある。

弥生土器はいずれも壺形土器で、口縁部は垂直気味に立ち上がり、外面にはわずかに浅い凹線が施されているなど、その特徴から弥生時代後期後半頃のものと考えられる。

土師器は壺や瓶などがある。壺は胴部中位から下半部にかけて最大胴径を有するもので、口縁部は緩やかに外反している。明確な時期については明らかではないものの、共伴した須恵器から

6世紀後半頃のものと考えられる。

須恵器の杯身・蓋は小型のものが多くみられ、身部の受けのたちあがりは短いものが多く、その特徴から6世紀後半頃のものと考えられる。

また、古代の杯身には、高台の付くものとそうでないものがあり、高台を伴うものは高台部がやや外側に踏ん張るものが多く認められることから8世紀から9世紀頃のものと考えられる。

なお、1点ではあるが、砥石が出土し、バチ形を呈するものである。

以上のように今回、調査を実施した大平遺跡の所在する後山地区は、三次市街地の北側に位置しており、その多くの地域が北部を流れる西城川支流域のきわめて矮小な可耕地を背景とした場所にある。現在まで知られている遺跡は、古墳時代後半を中心とした古墳群や、中世の山城跡などで、弥生時代から古代にかけての集落跡の存在は確認されていなかった。

こうした中で前述したような歴史的・地理的なものを背景として成立したと考えられる当該期の大平遺跡を確認したことは、地域の歴史研究にとって貴重な資料を提供したといえよう。

註

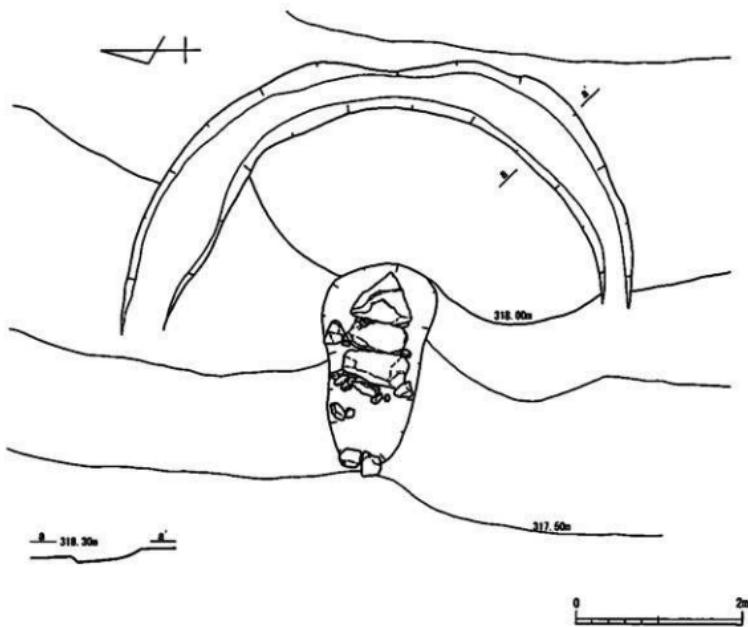
- (1) 広島県教育委員会・財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『松ヶ迫遺跡群発掘調査報告—三次工業団地建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査—』 1981年

V 後 山 大 平 遺 跡

V-1 調査の概要

大平遺跡の遺構を確認しようと尾根を挟んで周辺可耕地とは反対側の西側斜面の表土を除去していたところ、石の並びとその斜面上方側で「C」字状の溝状遺構を検出した。石が並ぶ周辺の精査で、取り囲む落込みも検出されたことから、墳丘の盛土は流出しているが、箱式石棺を埋葬施設とし、周溝をもつ古墳であることが明らかになった。石棺の蓋石は現状では3枚残存していたが、数枚の蓋石が後世の擾乱で消失したものと考えられた。また棺部の石材は小口石では縦長に、側石では横長に使用されており、蓋石との隙間には小石を充填していた。一方、棺底は上面平坦な石を敷いていた。

棺内の足元側と考えられる箇所に須恵器の杯蓋2点・杯身1点が副葬されており、この副葬されていた須恵器から埋葬施設は古墳時代後半の6世紀後半から7世紀初頭頃に造営されたと考えられる。



第V-1図 墳丘測量図 (1:60)

V-2 遺構と遺物

(1) 検出遺構 (第IV-10・11図、図版19・20)

SB2の北側に直近して位置する。古墳は斜面上方側を「C」字状に溝を掘り込んで墓域を区画するもので、この溝は直径6~7m、幅90cm、深さ10~15cm、断面浅い「U」字状を呈すし、溝の覆土は暗褐色土であった。古墳の墳丘盛土はすでに流失しており、表土下に蓋石が露出する状況であった。

古墳の埋葬施設は箱式石棺で、蓋石は東側に3石残存したが、西側は失われていたことから、本来の蓋石の枚数は明らかでない。東側の蓋石が最も大きく、幅約70cm、長さ約60cm、厚さ約25cmの三角形をした石を使用していた。ほかの2石は細長い石を使用していた。

石棺の棺内規模は、長さ約160cm、東側小口が約40cm、西側小口が約35cmであり、東側小口部が西側より広いことから頭位に当たると考えられる。

石棺の両小口石は縦長に、また側石は基本的に横長に板石を使用しており、蓋石との隙間には小蝶を充填して、蓋石を架構していた。また棺床面は頭側に大型の平坦な石を、また足元側には小型の平坦な石を敷いていた。

石棺の掘方は、上端の長さ2.35m、下端の長さ1.95m、頭位側の上端幅1.3m、下端幅0.65m、足元側の上端幅0.60m、下端幅0.50mで、底面は東側から西側にやや下がり、壁際には棺材の板石を据えるための溝を掘っている。

副葬品としては、足元側の南西隅で須恵器の杯身1点、杯蓋2点の3個体が出土した。

(2) 出土遺物 (第IV-15図、図版23)

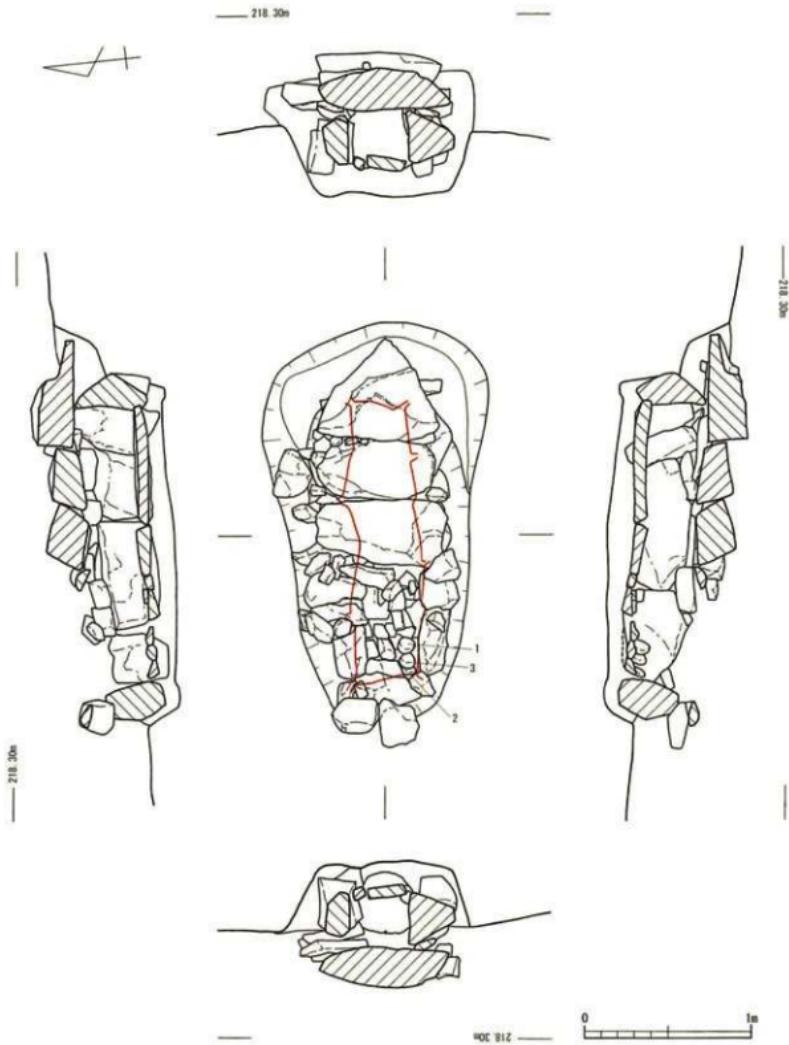
4は土師器で、それ以外は須恵器である。また、1~3は石棺内部に副葬されていたものであり、それ以外は古墳の周辺部で採集されたものである。

1・2は杯蓋で、丸い天井部で、口縁部は垂下し、端部は丸くおわる。

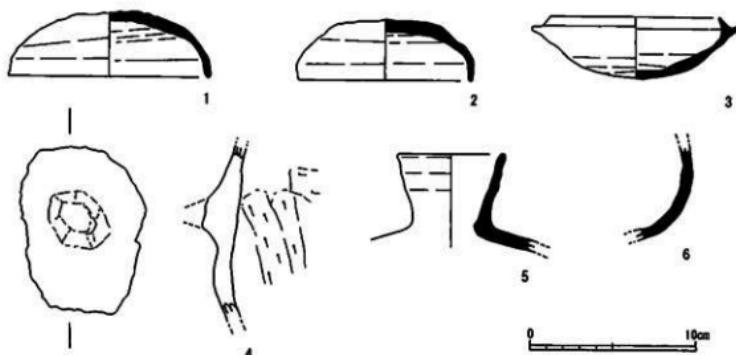
3は杯身で、丸底の底部から緩やかにカーブして体部が立ち上がり、受部は外上方に短くのびておわる。またたちあがり部は直線的に短く内傾しておわる。1・2の杯蓋とはどちらとも大きさから組み合わない。

4は瓶の把手が付く付近の体部で、上下に直線的にのびる。5は提瓶の口縁部で、屈曲した頸部から外上方にのび、端部は丸くおわる。6は瓶の体部と思われるもので、丸く立ち上がる。

これらの遺物はその特徴から6世紀後半から7世紀初頭頃のものと考えられる。



第V-2図 箱式石棺実測図 帯数字は遺物番号 (1:30)



第V-3図 出土遺物尖洞圓 (1:3)

表 出土遺物観察表

通鑑番号	報告書 番号	種類	器種	大きさ(cm)			調査	色調(外因)	地土	備考
				口徑	高さ	最大径				
吉鏡	1	灰窓器	杯形	12.0	3.8		外面: 刮削ヘラケズリ、ロクロナデ 内面: ロクロナデ、ナデ	灰褐色	細砂粒多含	
	2	灰窓器	杯形	10.4	3.6		外面: 刮削ヘラケズリ、コクロナデ 内面: ロクロナデ	灰褐色	砂粒多含	
	3	灰窓器	杯形	10.1	3.7		外面: 刮削ヘラケズリ、コクロナデ 内面: ロクロナデ、ナデ	灰褐色	細砂粒多含	
	4	土師器	瓶				外面: 不明 内面: ケズリ	灰褐色	砂粒多含	把手が付く
	5	灰窓器	深板	(6.2)			外面: ロクロナデ 内面: ロクロナデ	灰褐色	砂粒多含	
	6	灰窓器	碗?				外面: ナデ? 内面: ロクロナデ	灰褐色	細砂粒多含	

V-3まとめ

後山大平古墳は、周辺の可耕地とは尾根を挟んで反対側の西側斜面に位置し、箱式石棺を埋葬施設とする6世紀後半から7世紀初頭頃に造営されたものであることが明らかとなった。ただ、周辺部に居住した人々から視覚的に古墳の存在を認識できない地点に作られた理由は明らかではない。

また、箱式石棺の棺床には敷石が施されていた。近年の発掘調査において、三次地域では5世紀から7世紀にかけての古墳にこのように箱式石棺を埋葬施設とし、棺床に敷石を施したり、砾床としたりする例が見られる。

向江田町所在の椎現第1～3号古墳⁽¹⁾においては、3基の古墳のうち2基で複数の箱式石棺を埋葬施設とする古墳が確認されている。このうち、第2号古墳SK1では砾床を伴っていた。また、箱山第5号古墳⁽²⁾SK1・2においても同様に砾床を伴う箱式石棺が確認されている。さらに、宮の本古墳群⁽³⁾のうち横穴式石室を中心の埋葬施設とする第20号古墳の周辺に造られた箱式石棺の中にも敷石や砾床の類例がみられる。

5世紀から7世紀にかけて箱式石棺の棺床に板石や砾を敷くことは、本地域において一般的に認められる葬礼であったと考えられる。

次に古墳の被葬者について考えると、大平遺跡が集落として最も隆盛をみた時期が6世紀後半頃であったことが明らかとなっている。古墳はほぼ同時期に築造されていることから、集落を支えた家長的人物が埋葬された可能性が考えられよう。

註

- (1) 財団法人広島県教育事業団・広島県立歴史民俗資料館「中国横断自動車道尾道松江線建設事業に係る三次市城郷文化財発掘調査報告会一資料一」 2007年
- (2) 註(1)と同じ
- (3) 財団法人広島県教育事業団・広島県立歴史民俗資料館「中国横断自動車道尾道松江線建設事業に係る備北地区城郷文化財発掘調査報告会一資料一」 2008年

札場古墳



札場古墳



a 墓丘検出状況
(南東から)



b 墓丘南側石積
(南西から)



c 墓丘北側石積
(北東から)

札場古墳



a 墳丘周溝土層断面（A-A'）（南東から）



b 墳丘土層断面（A-A'）（南東から）



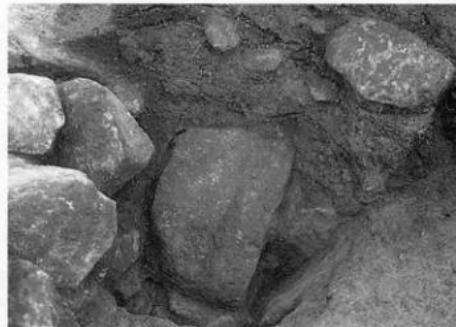
c 墳丘土層断面（A-A' , 南側）（南東から）



d 墳丘土層断面（A-A' , 北側）（南東から）



e 石室掘方土層断面（A-A' , 南側）（南東から）



f 石室掘方土層断面（A-A' , 北側）（南東から）



g 墳丘土層断面（B-B'）（北東から）



h 石室掘方土層断面（B-B'）（北東から）

札場古墳



a 石室・封鎖石及び遺物
出土状況（南東から）



b 封鎖石及び遺物出土
状況(南東から)



c 封鎖石及び遺物出土
状況(東から)

札場古墳



a 石室奥壁（南東から）



b 石室床面（南東から）



c 石室床面（北西から）



a 石室南側壁（東から）



b 石室北側壁（南から）



c 石室南側壁（中央部）（東から）



d 石室北側壁（中央部）（南から）



e 石室南側壁（奥壁寄り）（北東から）



f 石室北側壁（奥壁寄り）（南西から）



g 石室奥壁裏込め状況（北側）（北から）



h 石室奥壁裏込め状況（南側）（西から）

札場古墳



a 石室基底石
(南東から)



b 石室基底石 (北側壁)
(東から)



c 石室掘方 (南東から)

札場古墳



a 西側集石（西から）

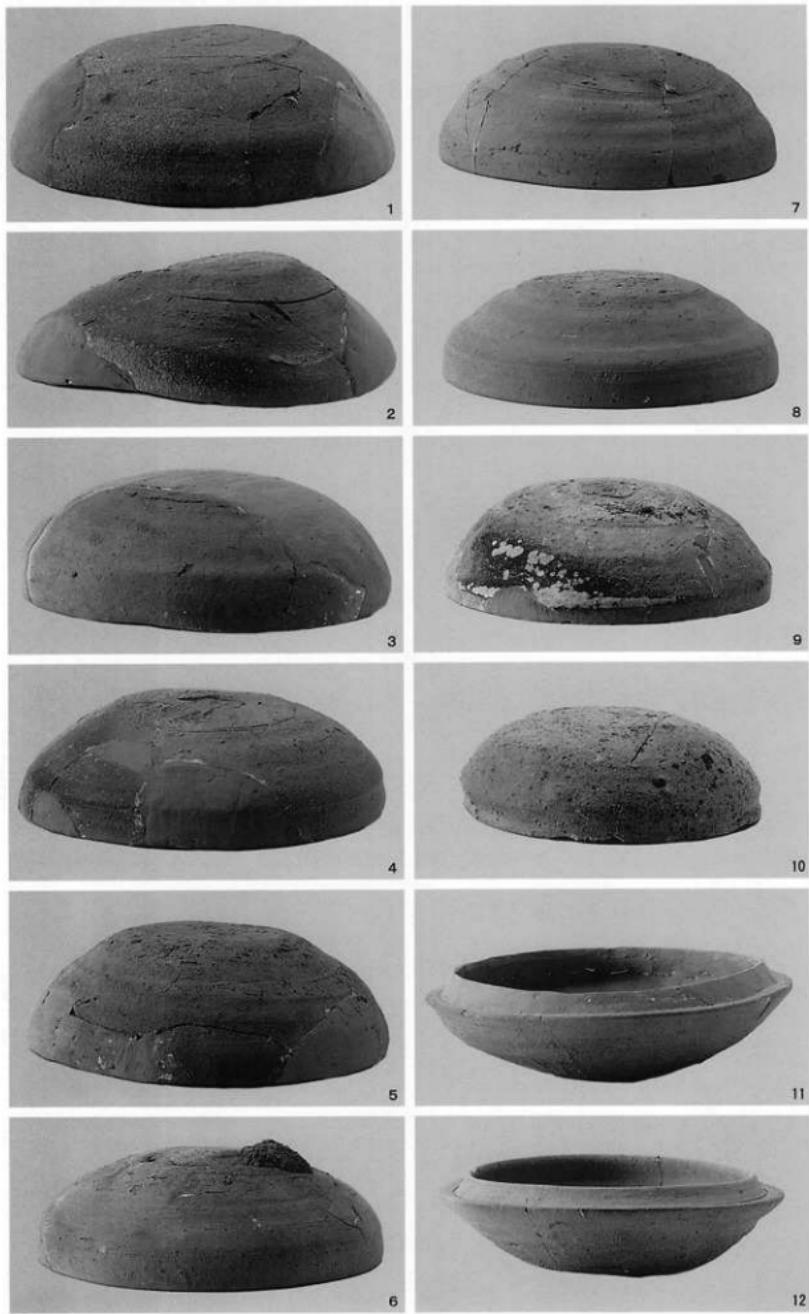


b 西側集石内遺物出土
状況(北西から)

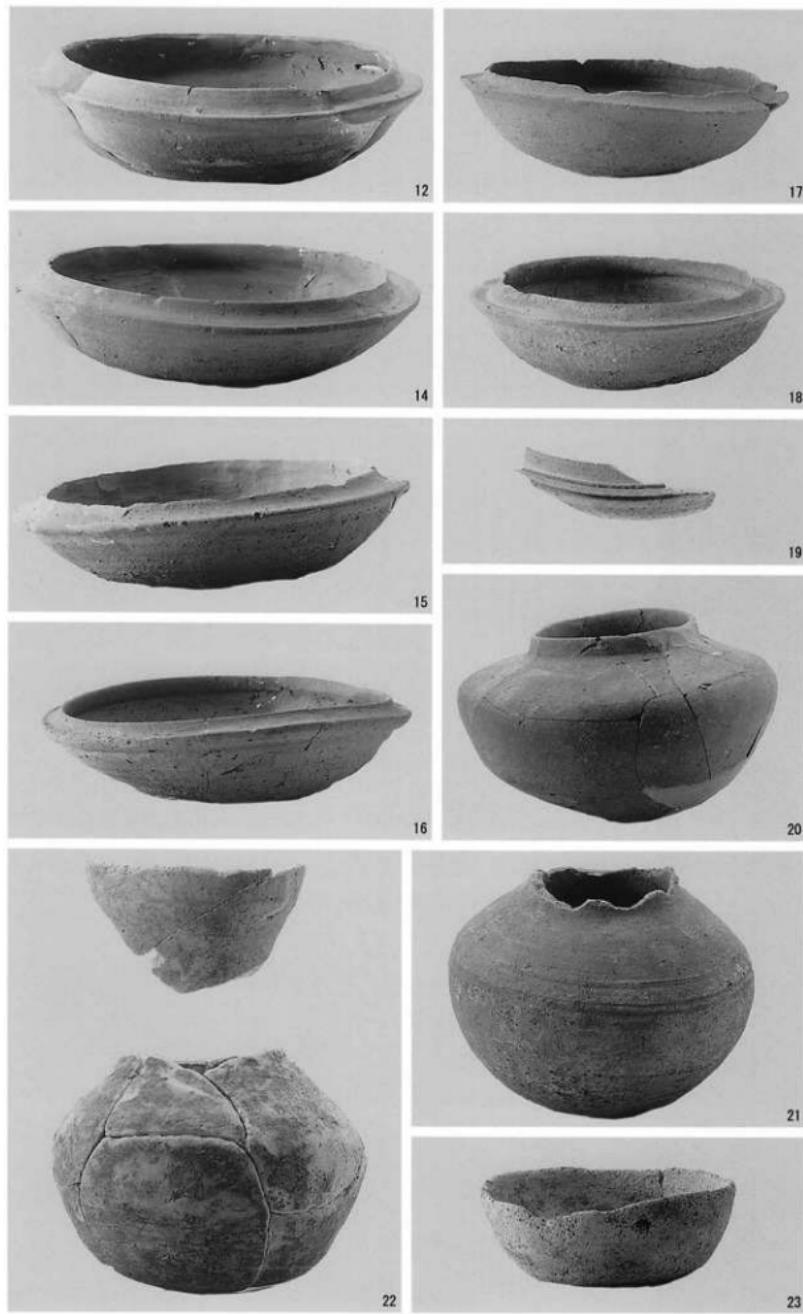


c 西側集石土層断面
(西から)

札幌古墳



出土遺物 1



出土遺物 2

札場古墳



出土遺物 3

大平遺跡



a 遺跡遠景
(南から)



b 遺跡近景
(北西から)



c 調査前全景
(北から)

大平遺跡

a SB1 炭化材検出状況
(西から)



b SB6 遺物出土状況
(西から)



c SB1・6 完掘状況
(西から)



大平遺跡



a SB2 検出状況
(東から)



b SB2 炭化材検出状況
(東から)



c SB2 カマド検出状況
(東から)

大平遺跡

a SB3 検出状況
(東から)



b SB3 内土坑遺物出土状況
(北から)



c SB3 完掘状況
(東から)



大平遺跡

a SB4 床面検出状況
(北から)



b SB4 カマド検出状況
(西から)



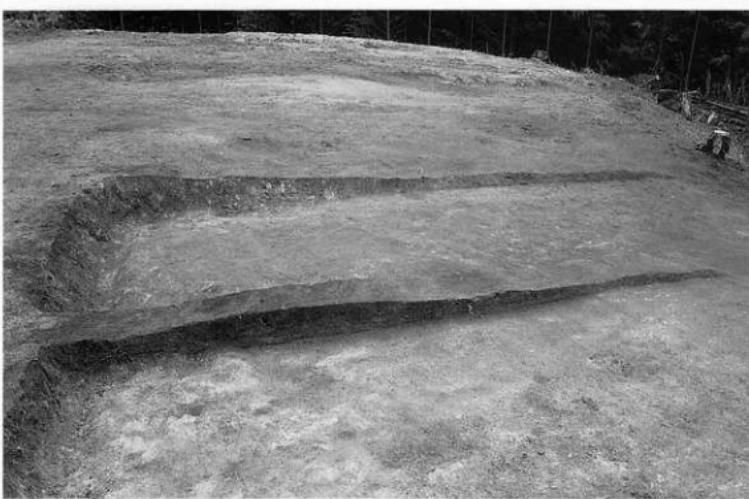
c SB4 完掘状況
(北から)

大平遺跡

a SB5 検出状況
(西から)



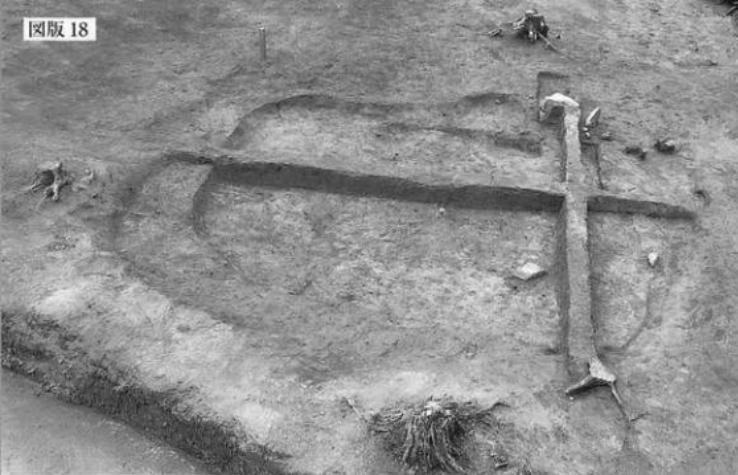
b SB5 床面検出状況
(南から)



c SB5 完掘状況
(西から)



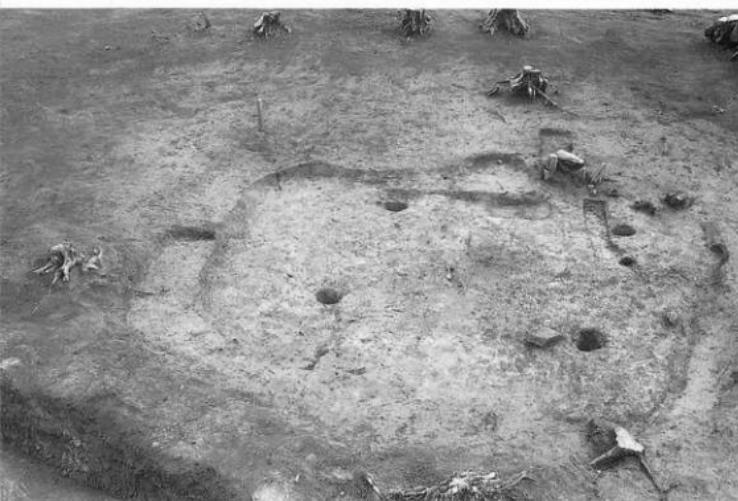
大平遺跡



a SB7 床面検出状況
(西から)

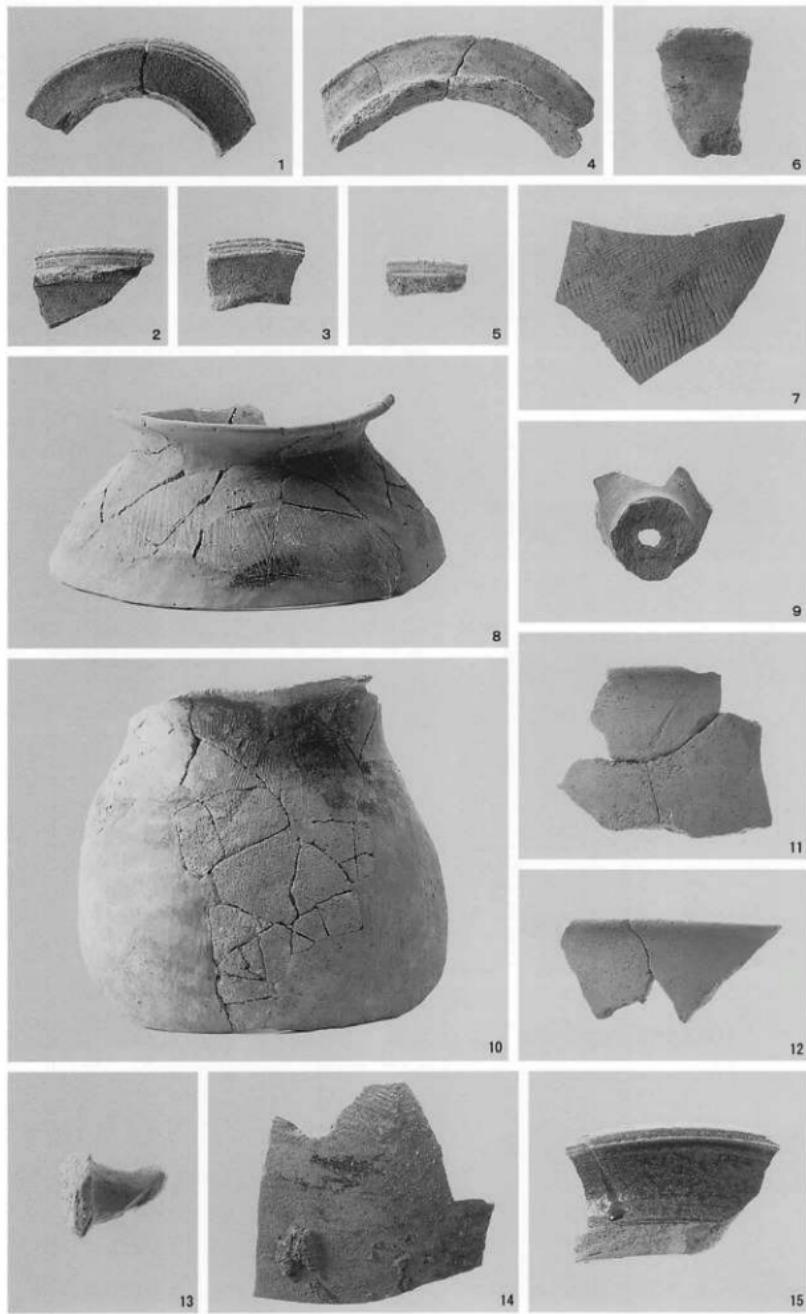


b SB7 カマド検出状況
(西から)

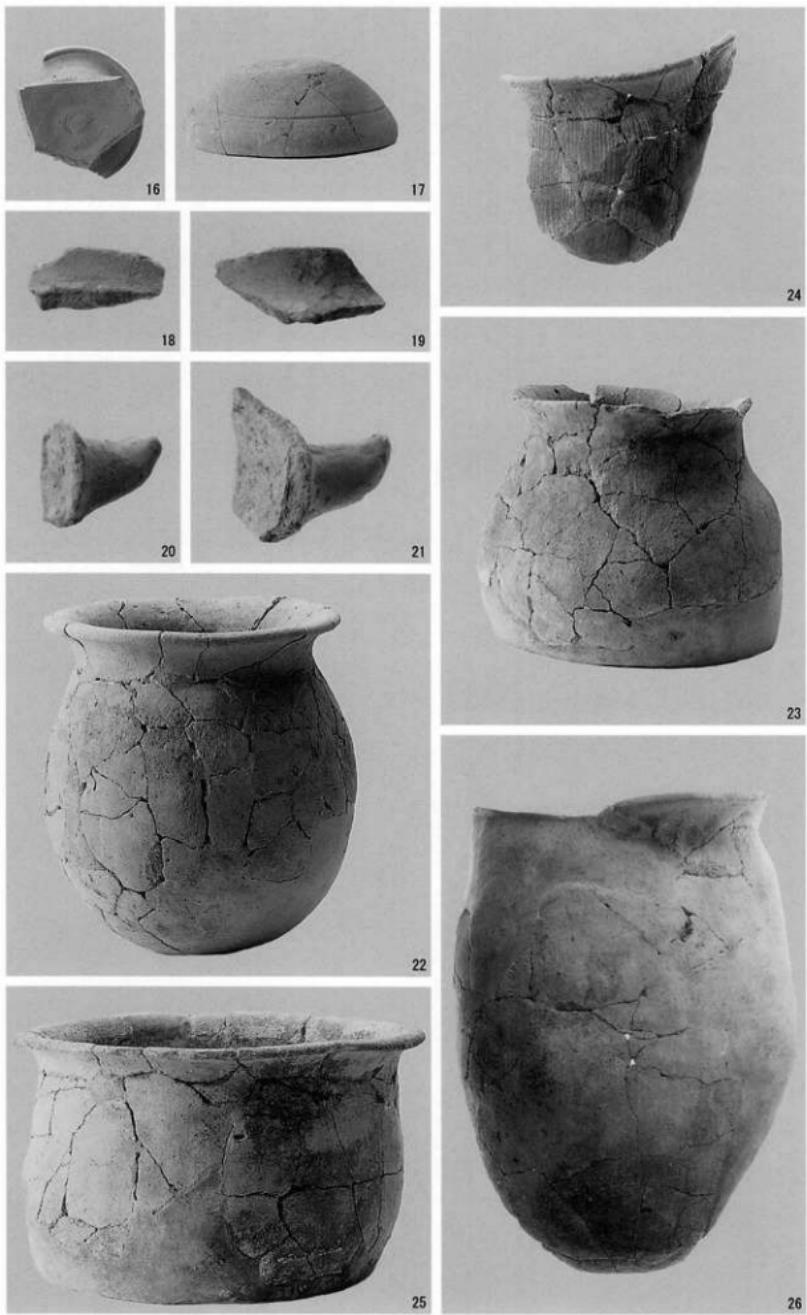


c SB7 完掘状況
(西から)

大平遺跡

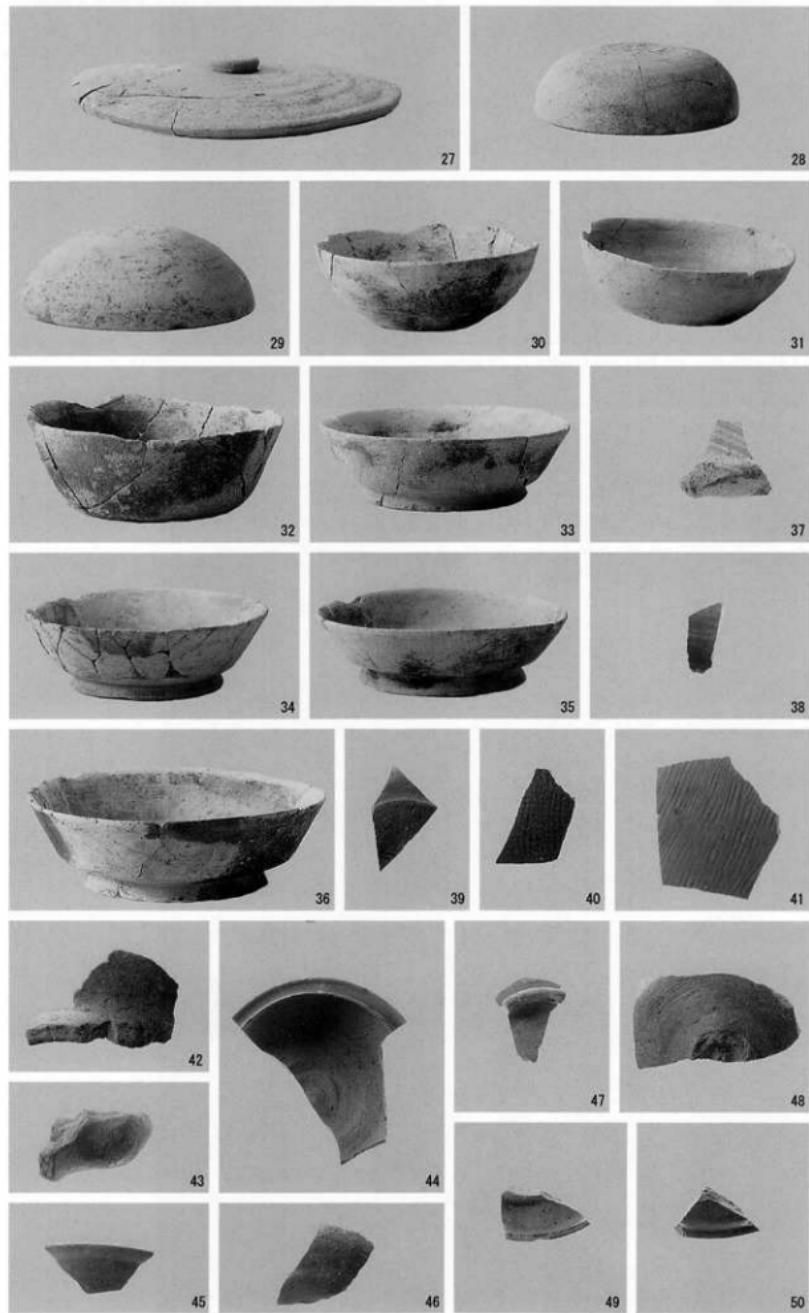


出土遺物 1



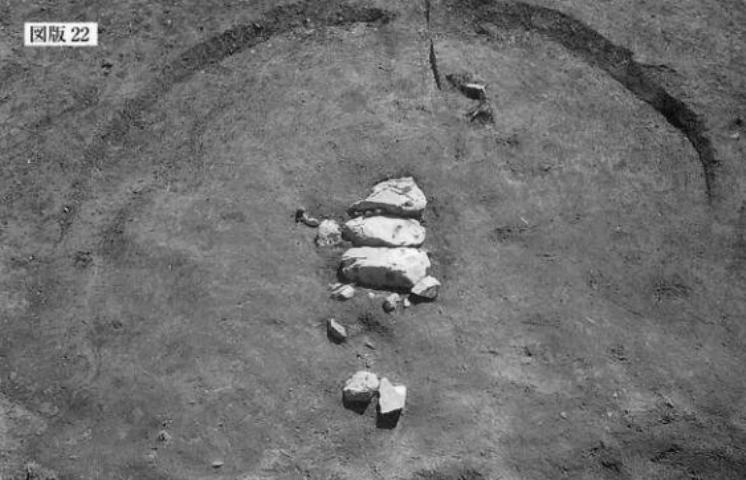
出土遺物 2

大平遺跡



出土遺物 3

後山大平古墳



a 古墳検出状況
(西から)



b 箱式石棺蓋石検出状況
(北から)



c 箱式石棺内検出状況
(西から)

後山大平古墳

a 箱式石棺内検出状況
(北から)

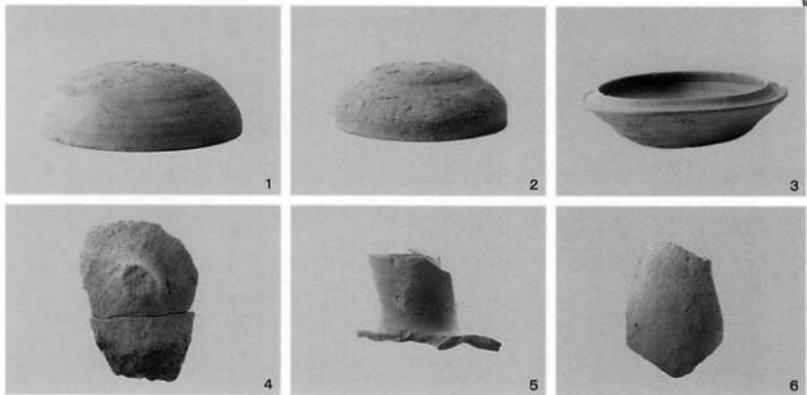


b 遺物出土状況
(北東から)



c 古墳完掘状況
(西から)





出土遺物

報 告 書 抄 錄

ふりがな	ちゅうごくおうだんじどうしゃどうおのみちまつえせんけんせにともなうまいぞうぶんかざいはつくつちょうさほうこく(7)						
書名	中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(7)						
副書名	札場古墳・大平遺跡・後山大平古墳						
巻次							
シリーズ名	財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書						
シリーズ番号	第26集						
編著者名	唐口勉三・銀治益生						
編集機関	財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室						
所在地	〒733-0036 広島県広島市西区観音新町四丁目8番49号 TEL 082-295-5751						
発行年月日	西暦 2009年3月19日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 度	東経 度	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
札場古墳	ひろしまけん あさし じょうじやまちょう 広島県三次市後山町	34209	34209-719 34° 49' 08"	132° 54' 45"	20051121 ~ 20060127	324	中国横断自動 車道尾道松江 線建設事業
大平遺跡	ひろしまけん あさし じょうじやまちょう 広島県三次市後山町	34209	34209-2888 34° 49' 27"	132° 54' 41"	20070621 ~ 20071005	2,200	中国横断自動 車道尾道松江 線建設事業
後山大平古墳	ひろしまけん あさし じょうじやまちょう 広島県三次市後山町	34209	34209-2889 34° 49' 27"	132° 54' 41"	20070621 ~ 20071005	大平跡に 含まれる	中国横断自動 車道尾道松江 線建設事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
札場古墳	古墳	古墳時代後期	古墳 1基 集石 1か所	須恵器 鉄鋤 鋸 耳環 鉄刀	横穴式石室 埴丘の列石		
大平遺跡	集落跡	弥生時代後期 後半から古代	堅穴住居跡 5軒 堅穴住居状遺構 2基	弥生土器 土師器 須恵器 砧石			
後山大平古墳	古墳	古墳時代後期	古墳 1基	須恵器	箱式石棺		
要約	札場古墳	古墳は直径8~9mの円墳で、埴丘の南西側に幅4.0~5.5mの周溝を設けている。埴丘北部に鉢巻状の石列が、南西部には葺石状の石積がある。埋葬施設は南東に開口する無袖式の横穴式石室で、規模は、奥行約4.9~5.1m、幅0.9~1.1m、高さ1.2~1.3m(推定)である。石室床面には敷石があり、石室入口部分で封鎖石の基底部が残っていた。石室の南東側に墓道が延びている。出土遺物から、本古墳の造営や追葬の時期は6世紀第4四半期~7世紀前半と推定される。なお、埴丘西側にはおよそ35m×32mの範囲に不整形に広がる集石があり、集石の中間から鉄刀が1点出土した。集石の性格や時期は不明である。					
	大平遺跡	遺跡は標高約319mの丘陵尾根に営まれた集落跡である。遺跡は周囲の水田面から約47mの比高があり、集落を営むにはやや不便な箇所に位置する。調査の結果、5軒の堅穴住居跡と2基の堅穴住居状遺構を検出した。5軒の堅穴住居跡には2軒の族先家屋がある。出土した遺物から弥生時代後期後半から8~9世紀にかけて断続的に営まれた集落跡であることを確認した。					
	後山大平古墳	大平遺跡の西側斜面に位置し、周辺の可耕地からは決して見えない場所にある。埴丘はすでに流失しており、わずかに斜面上方側に「C」字形に延びる溝で墓域を区画するもののもある。埋葬施設は箱式石棺で、蓋石の枚数がすでに失われていた。棺内部は小口石が縱方向に、また側石が横長に石を使用して作られていた。また床面には板石を敷いていた。足元側の側石付近で須恵器の杯身1点と杯蓋2点が出土した。この古墳は6世紀後半から7世紀初頭頃に作られ、集落を支えた家長的人物が埋葬された可能性が考えられる。					

財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書第26集
中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告（7）
札場古墳・大平遺跡・後山大平古墳

発行日 平成21（2009）年3月19日
編集 財団法人 広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室
〒733-0036 広島市西区観音新町四丁目8番49号
TEL(082)295-5751 FAX(082)291-3951
発行 財団法人 広島県教育事業団
印刷所 株式会社インパルスコーポレーション